
とある幻想殺しと万華鏡写輪眼

あ・・・ありえん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある幻想殺しと万華鏡写輪眼

【Zコード】

N7665W

【作者名】

あ・・・ありえん

【あらすじ】

弟サスケのために死んだイタチがとあるの世界に転生して上条さんと一緒に活躍するという話。ちなみにイタチは死んだけど永遠の万華鏡写輪眼所持です。

なぜかって? こうでもしなきや 一方通行とか右席とかに勝てないと思つたからだよ!! まあ一応永遠の万華鏡手に入れた理由は話の途中で明らかにする予定ですのでご安心を。それと原作通りだけど少し変わります。

永遠の万華鏡とかふざけるなという人や原作に沿つてないとやだと

言う人は見ないことをお薦めします。それでもいいよっていう方はどうぞ。後それと小説を書くのは初めてなので少し変なところもあるかもしれません。がその所はご勘弁願います。

お気に入り登録数100突破！！

これからも頑張って書いていきます。

プロローグ

うちのアジトでは因縁を持つ一人の兄弟が命を掛けて闘っていた。

一人の名はセイはイタチモ、一人の名はセイはサスケ

チと闘つていた。

そしてその闘いの幕が降りようとしていた。

「俺の眼だ・・・俺の光。」

もはや満身創痍で歩く事で精一杯のイタチはまるで屍のようにサスケに近づいていた。

「やめんなよ……」

チヤクラをすべて使い果たして反抗することが出来ないサスケはこう叫ぶことしか出来なかつた。

形でサスケの左目に突き当てる

「許せサスケ……………これで最後だ…………。」

・ た な

・ し ん な 兄 で す ま な か つ

そう言つたイタチは意識が無くなりその場に倒れ込んだ。

そこでイタチは死んだのだ。

そしてその断絶は永久に続くと思われた。
しかし・・・

第一の巻 学園都市

「」は学園都市

なんで記憶だ暗記術という名目で超能力研究即脳の開発を行つてゐる都市。

その目的は、人間を超えた身体を手にすることで神様の答えにたどりつくことだとか。

大勢の学生を集めて授業の一環として脳の開発を行つており、学生の数は総人口の8割に及ぶ。

学校や学生寮などの数も半端ではなく、教育機関を中心とした造りから学園都市と呼ばれている。

東京西部を一気に開発して作り出され、一部を神奈川や埼玉に及ばせながら東京都の中央三分の一を円形に占めている。

内部は一二三の学区に分かれていて、学区ごとに特徴がある。総括理事長はアレイスター＝クロウリー。

運営は十一名の学園都市統括理事会が行う。開発以外の科学技術もぶつ飛んでおり、最先端の技術を実験的に実用化・運用しているため、外よりも数十年分ぐらい文明が進んでるらしい。

そしてその学園都市第17学区のとある学生寮で一人の少年がのんびりと朝を過ごしていた。

「はあ・・・・。不幸すぎる。昨日はひどい目にあつたぜ。まあ今日は天氣も良いし、気持ちを入れ替えて布団でも干しておくれって、あれ？もう干してある？」

少年が布団を干そと外を見ると白い服を来たシスターらしき女子と黒い赤い雲の模様が描かれた服着た青年が引っかかっていた。

「え？ え？ ええーっ！？ おん・・・なのこ？ この服シスターさんか？」

外国人、だよな？ そしてこっちの人は、見慣れない格好だな。でも一応日本人みたいだ。」

少年は目の前の出来事に焦りながら呟いた。

「おなかへつた。

ねえ、おなかいっぴいご飯を食べさせてくれると嬉しいな。」

白い服を着たシスターが呟いた。

「お前・・・名前は？」

「インテックスっていうんだよ。よろしくね？」

「へー、名前はインテックスって・・・目次かお前はーーー？」

「ぐぐ・・・こ」は・・・一体？・・・」

うめき声を上げながら黒い服を着た青年が目を覚ましたようだ。

「あつちの人もやつと目覚めたか。あのーすいません。」

「何だ？」

「あなたのお名前は？」

「・・・うちはイタチ。」

「いつの人はあつちと比べたらまとものようだな。」

？」

「ちょっと・・・それはどういう意味かな？」

「名前がインテックスって誰がどう聞いてもふざけてんだろ！！」

なー！ふざけてないもん！！ちやんとした名前だもん！！」

バイバイソウルアーティスト

それはなんどなく私を黒鹿はしているね？」

おし

ほしのくに いふか

まゝがそこは人れて欲しいのが

「おどろき」

少年がそう言つた後に中へ戻つたとした時、床に滑つて豪快に転んだ。

そしてヘチヤと音をたてなかなか。ハと真下はあつたホ、エエツグを背中で押しつぶした。

「くそ・・・今日も不幸な日が続きそうだ・・・。」

少年は半泣き状態で悲しそうに呟いた。

「それでお一人はどうこう事情であんな所にいたんでせうか？」

少年はイタチとインテックスに尋ねた。

「実は俺にもわっぽり分からん。死んだはずなのになぜかあそこへいた。」

「え？死んだってどうこういつですか？」

「悪いが君には話せない。」

「はあ、やつですか？」

「ついでだが」「はどこなんだ？」

「えつ？学園都市ですか。」

「学園都市？聞いたこともないな。」

「えーと学園都市とこののはですね・・・。」

少年は学園都市について知っていることを全てイタチに話した。ついでに自分の名前も教えておいた。

「とまあ俺が知っているのはこれだけなんだ。悪いな。」

「気にするな大体は理解した。」

「そうか。でお前はビリなんだ?」

「私は追われていたから飛び移ろうとして失敗したからあそこへいたんだよ。」

「追われてるって誰に?」

「魔術結社だよ。私が持つ十万三千冊の魔道書のためにね」

さつきまでとは雰囲気がかわったインデックスはそう呟いた。
そしてさつきまで普通の顔をしていたイタチは急に真剣な顔になつた。

「はあ? 魔道書? 魔術結社? そんなもん信じられるかよ。」

「なつ、魔術は存在するもん! ! 」

インデックスは慌てながら言つた。

「インデックスといったか? ならば君の出来る魔術を見せてもうおうか。」

話はそれからだ。 「

「そ。そだ。なら魔術とやらを見せてみろよ。」

イタチと上条は少し興味を持ったような表情で見つめた。
しかし・・・

「うう・・・実は私魔力がないから魔術が使えないんだ・・・。」

インテックスはそう答えた。

「おいおい使えないなら魔術があるかどうかなんて分からぬじやないか。」

上条は呆れた様に呟いた。

隣にいたイタチも少しだけ疑いの表情を見せた。

「魔術は・・・あるんだよ。」

インテックスはいじけながら言った。

上条はダメだこいつと思いながら見ていた。

「思い出した、私には歩く教会と言つ究極防御魔術がかけられてる服があるんだよ。」

「防御術？それは万華鏡の瞳術須佐ノ乎の様なものか？」

「まんげきょう？すたのお？なにそれ？」

二人はキヨトンとした顔でイタチに言った。

「忍術も知らんのか？割と当たり前だと思つていたが・・・。」

「ああもう魔術だの忍術だのもつ訳が分かんなくなつてきた。」

上条は頭をかきながら叫んだ。

「信じられないのなら……見せてやるつ。」

イタチは印を結びインテックスに向かって火を吹いた。
普通ならインテックスは火傷をするとこうだが無傷だった。

「えつ・・・・・？何今の・・・・？」

上条は口をポカンと空けながら呟いた。

「・・・君の言つてた防御術は本当のようだな。」

「ふん！当然なんだよー。」

インテックスは偉そうな感じで呟いた。

「えー？ちょっと上条さんには訳が分からなかつたんですけど・・・。」

「

「今のが忍術だ。」

「まあ確かに口から火を吹いてはいましたけど。ていうかなんで手を色々組み合わせていたんですか？」

「これは印と言つものだ。簡単に言えば術を発動するときのトリガーとなるものだ。ちなみにこの子を狙つたのは忍術の有無を認めさせたためと魔術があるのか確かめるためだ。」

「なるほど・・・そしてこのスターの言つことが本当だったと・・・」

「これで魔術は認めてくれるかな？」

「はいはい認めますよ。

あーそりそり俺にも生まれついた時から変な能力を持つていてるんだよな。」

「どんなの？」

「異能の力など神の奇跡とか何でも打ち消すこの右手や。」

「え・・・神の奇跡。ブツ WWW!-!-」

「な、何がおかしい!-!怪しい通販を見てるよつな反感いやがって言われてもねえ。」

「だつてさ、神様を信じてない人に神様の奇跡を打ち消せますって言われてもねえ。」

「クソつ、ムカツク。こんなイカサマ少女に馬鹿にされるとほ・・・」

。

「イカサマじゃないもん。なんなら試してみる?」

「何をだ?」

「さつきも言つたけどこの服には防御魔術が掛かってるよね。なんなら君の右手でこの服を触れてみてよ。」

「えつ?それってやばくないか?」

「それせつまり君の言つてゐる」ことが嘘だと認めるわけだね？

「おもしれえ……そこまで言つのなら確かめてやるひじやねえか
ああ……」

挑発に乗つた上条はインテックスの服に勢い良く触れた。
するとインテックスの着ていた服がビリッと音をたてながら無
残に敗れた。

「い・・・いやあああああ――――――――――――――――――

インテックスは上条に向かつて噛み付いた。
しかし、その前にイタチの手刀を喰らつてその場に気絶した。
そしてインテックスを毛布でくるんでベッドに放り投げた。
これがでに費やした時間約3秒。

「あのーイタチさん……。」

「……なんだ？」

「女性の裸を見てなんとも思わないのですか？」

「別に……。」

「……それでどうします？」のナ?

「問題ない少しすればすぐに田代覚める。」

「だとここのですが……。」

「それはそうと頼みがある。」

「なんでしょうか?」

「忍具の手入れをしたいのだが少しの間だけここにこもっててくれ。」

「そんな水臭いこと言わずにずっとここにいろよ。どうせ行く宛がないんだろ」

「・・・大丈夫なのか?」

「フフン、一人や一人増えたところで上条さんには何の問題もありませんよ。」

「そりか・・・すまないな。」

「なーに困ったときはお互い様だぜ。」

「フッ・・・そうだな。ではしばりく世話をにな。」

イタチは笑いながら呟いた。

「あつ、いけねええ!! 今日が特売セールだと言つのを忘れてた!!」

「・・・それは重大な事か?」

「重要どころか超重要ですよ!! これに行かないと今日の夕食は抜きになります。」

「そりゃ・・・それは残念だな。」

「なんですかそのじうでもいいですよみたいなセリフは・・・。」

「俺は忍びだ、任務によつては何日以上もかかるときだつてある。そういう事になつても大丈夫なように普段から長期保存出来る食料は持ち歩いているものだ。」

「で、今はどれくらい溜め込んでいるのですか?」

イタチは懐を探り始めた。

しかし数分立つても食料は出てこず、クナイや手裏剣や起爆札や口寄せの巻物などの忍具が大量に出てくるだけだつた。そして部しばらくした後に立ち上がり

「・・・やはり俺も当麻君についていく事にしよう。」

それを聞いた上条は盛大にずつこけた。

「結局食料は出てこなかつたんですか!――!？」

なんだかんだ言つて一人は特売セールがやつてゐるスーパーへ行くことにした。

そしてイタチの鳥分身により上条達は普段の3倍の食料を手に入れることに成功した。

「完全下校時刻を過ぎています。学生の皆さんは速やかに帰宅してください。」

「意外とあつさり取れたな。」

「忍術つてほんと便利だな・・・。チートだろ・・・。」

一日になんども不可思議なことが起きたせいか上条の頭の中はてんわあんやになつていた。しかも重度の。

「どうした?もう寮に着いたぞ。」

「あ・・・そうですか・・・。」

「元気がないな。」

「・・・ほつといてください。」

二人がしばらく歩いて上条の部屋の近くに来ると。
清掃ロボットが部屋の前をうろちゅうろしていた。

「当麻君あれはなんだ?」

「あれば清掃ロボットと言つて名前の通り清掃するロボットです
よ。」

ていうかなんで人の部屋の目の前にいるんだ?つてあれ・・・インデックス?」

上条はインデックスの元に歩み寄つた。

インデックスを抱えてみると背中の当たりから大出血していた。

「しっかりしたインデックス！－ビニの誰にせられた！－？」

上条はかなり焦っていた。

「そこには隠れている奴……そろそろ出でてきたらどうだ？」

「えつー！？」

「おやおや、バレてたみたいだね。」

物陰から身長2メートル超えで赤毛の神父のような男が出てきた。

「てめえ、一体何者だ！－？」

「僕たち……」

魔術師だけど？

第一の巻 学園都市（後書き）

いかがでしょうか？

自分的にはなんかイマイチのような気がしますが多分大丈夫だと思
う・・・。

2話は明後日か明後日に投稿する予定です。

第一の巻 炎の魔術師

魔術師・・・今そこに立っている赤毛の男はそう告げた。イタチは冷静でいたが上条の方は少しだけ体が震えていた。

「やはりやうか・・・」

この言葉を聞いた赤毛の男は少しだけ気になつたよつた雰囲気でイタチを向いた。

「やはりといひのは・・・びつこひとかな?」

「数時間前にこの子の事を調べた時に手に入れた情報を元にしてだ・・・」

「何?」

「この子は10万3千冊の魔道書を持つてると告げた。

俺も最初はイカサマだと思つたが・・・」

イタチはにじで目をつぶり、1秒ぐらいした後に再び目を開いた。その目を見た赤毛の男は表情を変えた。

「その赤い瞳・・・貴様一体何者だ」

赤い瞳、イタチは輪眼を発動した。

「あなたが知る必要はない・・・」

さて、本題に戻すがこの眼で見透かしてみたらある程度の事は理解

した・・・。」

「」でイタチのかわす空氣が変わつた。

そしてイタチは写輪眼で見透かした事を全て打ち明けようとした。

- 「」の子は一〇万三千冊の魔道書とやらを持っているのではない・・・
- この子は膨大な魔術とやらの文献を記録して保管する図書館のようない存在だ。」

「・・・・・」

この言葉を聞いた赤毛の男は度肝を抜かれたよつた表情をした。

「えつ！？それって・・・ビリこのことなんだ・・・？」

頭の中が混乱している上條はイタチに尋ねた。

「やつ荒てるな。わかりやすくつくり説明してや。」

るといいかけたイタチだが、いきなり火が彼のとなりを通過した。火を放つたのはどうやら赤毛の男のようだ。しかしその顔はかなり焦つているようだつた。

「君は秘密を知りすぎた。悪いけど死んでもらひ。」

「勝手な言い草だな。あなたの気持ちも分からなくはないが・・・。」

「最後に一つだけ聞いておきたい・・・。」

「なんですか？」

「どうして僕が魔術師だと分かった。」

「さつき言つたはすだ・・・、この子を調べたと。魔道書のついでに魔術師の力の源などを見切つた。そこから先はあなたの判断にお任せする。」

「・・・なるほど、そういうことか。」

そつ言うと赤毛の男は煙草をベランダの下に向かって吐き捨てた。吐き捨てられた煙草から炎が勢いよく吹き出した。吹き出された炎は徐々に赤毛の男の掌に集まつていった。

「僕の名はスタイル・マグヌス。
と・・・言いたい所だけどここは「Forrest 931」と名乗つておひつ。」

「？」

「魔法名だよ。日本語では強者と言つ意味さ。だけど本当は魔術使うときに魔法名を言つてはいけないんだよね。古臭いしきたりだから僕には理解できないけど。重要なのは魔法名を名乗り上げた事でね。」

僕たちの間ではむしろ「殺し名」かな。」

「短くまとめると俺を殺すと言つ意味ですか？」

「まあ、そう解釈してくれて構わないよ。」

両者の間にまく口では言い表せないほどの殺氣で覆われていた。

「当麻君……。」

「なんだー?」

イタチは懐から薬を上条に向かつて投げた。
すかさず上条はそれをキャッチした。

「これって……。」

「その子を連れてどこかへ行け……。」

「え、でも。」

「時間がない。早く手当しないと手遅れなる。」
「は俺に任せろ。」

「ぐ……。分かった。でも死ぬなよイタチさん……。」

「フッ……まだまだこんな所で死ぬつもりはない……。」

物静かにそう呟いた。

そう言つた後に上条は右手が触れないようにインテックスを抱えて

その場を去つた。

上条の気配が消えたのを確認したイタチは戦闘体制に入った。

「君ね……たつた一人で僕に勝てると思つてるよ!ただけど……
すぐにその考え改めさせてあげるよ……。」

炎を充分溜め込んだスタイルはその手をイタチに向けた。

「巨人に苦痛の贈り物！！」

掛け声と共に鞭のような形状をした炎をイタチ目掛けて放った。イタチの立っている場所に爆発が起きた。

その衝撃で地面が削れとなりの扉などが吹き飛んだ。辺には煙がモクモクとさまよっていた。

「ふう、やりすぎたかな・・・？残念だつたね。

まあその程度じゃ何回やつても僕には勝てな『』

「後ろががら空きですよ・・・。」

何？と言いながらスタイルは後ろに振り向いた。

そこには本来なら死体になつてるか灰になつて跡形もなく消え去つてるハズのイタチが立つっていた。

「その程度の威力で俺を殺すとは・・・。舐められたものだな・・・。」

かわしたと言うのか？だが移動するときの動きが全然見えなかつたぞ！？

とスタイルは頭の中で呟いていた。

「今度はこちから行かせてもらいますよ。」

イタチは手裏剣やクナイをスタイルに向かつて投げた。スタイルはそれに対して炎の魔術で手裏剣を溶かした。

溶かし終えた瞬間を狙つてイタチは超スピードでスタイルに近づき、スタイルの腹めがけて蹴りをくらわせた。

蹴りを喰らつたスタイルは5メートルくらい吹っ飛んだ。

「グハツ！！」

ダメージが大きかったのか、そのせいか口から唾を吐き出した。

「無様だな・・・。」

そう言われたスタイルは犬のような呻き声を出しながらイタチを睨みつけていた。

「その程度じゃ何回やつても勝てないよと詰つセリフ・・・。そのままお返ししよう。」

スタイルはずっと黙り込んでいた。
そしてしじみぐくすると

「世界を構築する五大元素の一つ・・・」

「？」

スタイルが何か呪文のようなものを唱え始めた瞬間、炎が周りを覆い尽くすように出現した。

「・・・これは？」

「偉大なる始まりの炎よ

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり

それは穏やかな幸福を満たすと同時に、冷たき闇を滅する凍える不幸なり

その名は炎、その役は剣

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ……」

もの凄い轟音をたてながら巨大な炎の竜巻が出現し、その熱波でドアの取っ手や金属で出来た手すりを溶かしていった。やがて竜巻は人の形をかたどつていった。

その見た目はまるで火あぶりで弾圧されている人のようだ。

「魔女狩りの王イノケンティウス……その意味は「必ず殺す」」

イノケンティウスはイタチめがけて襲いかかってきた。

イタチはすぐさま印を結び、水遁・水陣壁で身を守ろうとした。しかしその水はあっさりと蒸発してしまい、イノケンティウスの攻撃をまともに

喰らつてしまつた。

攻撃を喰らつたイタチは数メートルぐらい吹っ飛んだ。そしてその場にずっと倒れたまま微動だにしなかつた。

イタチ着ていた暁の衣はボロボロで所々に大火傷のあとが見られた。

「惜しかつたね。イノケンティウスは摄氏3千度の炎の塊。その程度の水じゃイノケンティウスは消せない。

仮に消せたとしてもいくらでも再生する。

とはいえ……僕の切り札を使わせると大したものだよ。君は。」

この勝負スタイルの勝ち、

誰もがそう思っていたが……

ボンッ！！

「何…？」

ステイルは驚いた、これが意味しているのは死んだと思われるイタチが突然煙を上げながら破裂したからだ。

「くつ…・・・身代わりか。」

ステイルは歯ぎしりをしながら立つていて。その頃イタチは気づかれないように『』輪眼でイノケンティウスを観察していた。イノケンティウスのカラクリを見破るために。

「・・・なるほどな、そういう事か。」

何かに気づいたイタチはこの場を立ち去つた。もちろん気づかれないように。そしてステイル達から離れたある場所にやってきた。

「」こつが炎の化け物の口寄せを制御する札のような物か。」

そこにはテープで止められた紙が無数に張り巡らされていた。そしてその紙には謎の文字が刻まれていた。

「」こいつを全部はがすのには時間がいるな・・・。とにかく手つ取り早い方法は・・・ん？」

上を見上げると火災探知機のよつなものがたくさんついていた。

それを見たイタチは何かひらめいたのか探知機にギリギリで当たら
ないよう

火遁の術を放つた。

すると探知機の中から水が雨のように降り注いだ。

その水の影響によってテープで止められた紙は剥がれ落ちていった。
それを確認したイタチは再びスタイルの元へ向かつた。

「くそつ・・・火災探知機か！こんな時に！」

「さて・・・そろそろ終わりにしましょうか。」

「何つ！？」

後ろを振り向くとイタチが立っていた。

「イノケンティウスはどうしたんだ！？」

「今頃粉微塵に消え去っているだろ？」

「消え去っているだと？、フフフ・・・あのねさつきも言つたけど
イノケンティウスは摄氏3千度の炎の塊なんだよ？この程度の水じ

や全然効かないよ。」

「自分の術の弱点も分からぬのか？」

「何？」

「お前は紙に変な記号を書いてテープであちこちとめていた。だがこうすることだと紙は剥がれ落ち、そして紙に書かれた記号も水に濡れることによってぼやけやがては溶けていく。そんな事も分からぬのか？」

「う・・・嘘だ。そんな理由で僕がイノケンティウスが消えるはずがない……。」

「ならなぜ、炎の化け物はやつてこない？」

「はつ……。」

「さて、さつきも言つたはずだ……。」

イタチは超スピードでスタイルに近づき、みぞおちに拳を打ち込んだ。

「もつ終わりにする。」

ウツーと囁く声をあげながらスタイルは倒れ込んだ。
氣絶したことを確認すると瞬身の術で上条の後を追つた。

「くそつ・・・しつかりしりょ。」

イタチに薬をもらつて来た上条はひたすらインデックスの看病していた。

しかしインデックスは依然として意識がない。

そこへイタチが現れた。

「あいつは？」

「たつたさつきケリを着けてきた。それで、そつちばじつだ？」

「一応血は止まつたけどまだ意識がない。」

「・・・そつか。」

「「」のまま病院へ運びたいけど問題があるんだ。」

「何だ？」

「「」いつ・・・「」のID持つてないんだ。
IDをもってないと不法侵入者として扱われるんだ。
下手をしたらイタチさんまで侵入者扱いだ。」

「ならどうする？言つとくが俺は医療忍術の心得はないぞ。」

「くそ・・・どうすりやいい。」

「人が黙り込んでいる間にインテックスが目覚めた。」

「どうま いたち どうしたの？」

「お前、田が覚めたのか？」

「どうま顔色悪いよ。」

「人のこと心配してる場合か！」

「応止血したが早くその怪我なんとかしねえとー。」

「大丈夫だよ。これくらい大したことないから。」

しかしそう言つた途端体制を崩して倒れそうになつた。

上条はつかさずインデックスを抱えた。

「お前10万3千冊の魔道書を持つてるんだろー。だったら傷を治す術ぐらいはあるはずだ。」

「あるにはあるけど君には無理。」

この言葉を言われた上条は一瞬訳がわからなかつた。

「私がとつまに術式を教えてそれを完全に真似したところでとつまの右手の力が邪魔をする。」

「何だと・・・。何でだよーーー!」この右手が悪いのかよーー畜生!...」

悔しさと自分の無力をこめて今にも泣き出しそうな上条はさう呟いた。

「とつまの右手じゃなくて超能力と言つのがダメなんだと思つ。」

「つまり・・・どうこうことだ?」

「魔術というのは才能のある人間には使えないんだよ。才能のない人間が才能のある人間と同じことがしたいつて生み出されたのが魔術。」

「じゃあつまり、ここで超能力開発を受けた学生達全員は。」

「やつ、魔術は使えない。」

この言葉を聞いた上条は絶望した。

知り合いに頼んでも能力開発を受けているからどうせこじつけ無意味だからだ。

しばらくの間冷たい雰囲気が周りを包んでいたが、

「なら・・・俺が試す。」

イタチが喋り出した。

しかも魔術を再現しようつと言つのだ。

「え？ でもいたちに魔術は使えないんじゃ・・・。」

心配そうにインデックスが話しかけた。
無理もないイタチは魔術なんて一度も使つたことがない人間だからだ。

「俺の眼、写輪眼は高速で動く物に対応でき、相手の忍術・幻術・体術の仕組みを見切り、また相手の術を自分の物として扱うことも出来る。そしてチャクラを流れや形として視認することができ、性質を色で見分けることも可能で、更には影分身と本体を識別する事ができるがそれは忍術のみだと思つていた。
だがスタイルとか言う男と鬪つた時に気づいたのだが、どうやらチャクラと魔力は大して変わらないみたいだ。おかげで魔道書のだいたいや炎の化け物などの仕組みも解析することができた。」

「じゃあつまり・・・。」

「俺なら魔術を再現できるかもしね。」

上条達に希望の光が見えた。

あくまで可能性だがイタチが魔術を使えるかもしれないと言つ期待が上がつた。

ちよつどその時インデックスの体を白い光が包んだ。

「警告第一 chapter 第六節出血による生命力の流出が一定を超えたため、強制的にヨハネのペンが目覚めます。

現状を維持すればおよそ15分後に必要な生命力を失い、私は絶命します。

これから私の指示に従つて適切な処置を行なつてくれれば幸いです。

「

「イタチさん、俺救急車を呼んできます。

イタチさんはインデックスの言われた通りの事を行なつてください。後絶対に意識が飛ばないようお願いします。」「

「言われなくとも分かってる。」

「なあインデックス、俺に出来ることはないのか?」

「ありません。

この場における最良の選択肢はあなたがこの場を立ち去ることです。あなたがいるだけで回復魔術が打ち消されてしまします。」「

上条は右手を見つめながら悔しそうな表情をした。

「当麻君・・・。」「

「イタチさん・・・インデックスの事お願いします。」「

「・・・ああ任せておけ。」

上条はイタチに任せた後すぐこの場を後にして立ち去った。

その時の上条の表情は憎しみや悔しさなどの怒りに満ち溢れていた。

第一の巻 炎の魔術師（後書き）

ヤバイ、なんかアイディアが段々浮かばなくなってきた。
他のコーナーの方々は良くもあんなにアイディアがポンポン浮かぶ
な。

しかも気がついたら上條さん今回活躍してねえやん。
なんかスマソ。

後次の話は明後日に投稿します。

第三の巻 魔術（前書き）

遅れていますません。

後急いで書いたからグダグダかもしれません。

それと題名もあまり思いつかなかつたので適当にしました。

大変申し訳ない。

上条が去つたあとイタチはインテックスの指示を仰ぎながらちょくちょくと魔術の準備をしていた。

そして今ようやく準備が整つたところだ。

「それでは天使を降臨させて神殿を作ります。

イタチさんは私の後に続いて呪文を唱えてください。」

「分かった。」

インテックスは呪文を唱え始めた、イタチもそれに続いて唱え始めた。

しばらくして突然机が揺れだし、やがては部屋を揺るがすほどの揺れになった。

数十秒ぐらいに揺れはおさまり、インテックスは呪文を唱えるのを止めた。

「リンクしました。」

「・・・ようやくか。」

「今このテーブルはこの部屋とリンクしています。

この部屋で起きたことはテーブルで起き、テーブルの上で起きたことはこの部屋で起きます。

思い浮かべなさい金色の天使一枚の羽を持つ美しい天使の姿を・・・

「・。」

（天使か・・・）

イタチは天使の姿を想像し続けた、やがて白い光のようなものが部屋の辺を

照らし始め、真ん中に天使のような女性が宙を浮いていた。
その容姿は自分が所属していた組織 “暁” の構成員の一人小楠によく似ている。

天使のようなものが微笑んだ途端上に昇華した。
それと同時にインデックスの怪我も回復した。
どうやら魔術は成功したようだ。

「生命の危機を脱出。ヨハネのペンを停止します。」

そう言ったとたん表情と雰囲気が一瞬で変わった。
それと同時にフラツと倒れそうになつた。
イタチはつかさずインデックスを抱えた。

「大丈夫か？」

イタチが心配そうに呴いた。

「治すには自分の体力がいるだけ。
怪我は治っているから問題ないよ。
それに背負わせることもなかつたし。」

「それは俺と当麻君にか？」

「・・・うん。」

「自分の事より俺達の心配するとはな・・・。
まあそんな事より今は早く寝たほうがいい。」

「

「そうだね。」

そう言ったあとでインテックスは深い眠りに入った。彼女が寝た後にイタチも机にしつぶせになつて寝た。

「イタチさん？起きてください。もう朝ですよ～。」

「んんんーー。とこう声を出しながらイタチは目覚めた。

「もう朝か……。
そつまえぱインテックスはどうしたんだ?」

「あー、アイツなら……まじ。」

上条が指をさした方向を見てみると、モードモードで鱗蛇のよつこ飯を食べているインテックスがいた。
その姿は昨日起きた事がまるで嘘のよつな感じだった。

「……元気そうだな。」

「ホントですよ、モードモードビービリに付きまとわれるわスキルアウトに追いかけられてクタクタだつていうのに無理矢理飯を作らされたんですよ……まあ……不幸だ。」

「それは災難だつたな。」

「上条さんの苦労が分かってくれんのはイタチさんだけですよ……。
」

上条は少しだけ嬉しそうに呟いた。

恐らく初めて同情してもらえたからだろう。

「なあインテックス、そろそろ本当の事しゃべつてくれないか?
上条さんとしては少し分からぬところが多いからな。」

「……いいよ。なら全てを話すよ。」

「」
インテックスのかわす空気が変わった。

「まず最初になんで十字教は一つだったのにいくつも分裂したと思つ？」

「んー？」

「宗教に聖地を混ぜたからだよ、分裂し、隊列し、バラバラの道を歩むことになつたからだよ。同じ神様を信じてゐるのにそれぞれが独自の進化を遂げて個性を手に入れたんだよ。」

「個性ねえ・・・。」

「私の所属するイギリス正教は魔術の国だから魔女狩りや宗教裁判など

対魔術師用の文化が異常にに発達したの。

だからイギリス正教には特別な部署が存在するんだよ。

魔術師を倒すために魔術を調べてその対抗策をねる必要悪の教会

”ネセサリウス”。

「ネセサリウス？」

「だけど穢れた敵を理解すれば心は穢れ、穢れた敵に触れれば体が穢れる。」

「つまりその穢れを一手に引き受ける部署、その最たるもののが君の頭に眠る魔道書図書館というわけか。

となるとお前は強引に叩き込まれたのか？」

「その通りだよ。」

「えーとつまらばどうこの事?」

「さつきの話をまとめるときには対抗策がある。忍術のようにな。10万3千冊に値する魔術の文献を記憶しておけば世界中の魔術師に対抗できるとみた。」

恐らく相当な記憶力を持つているこの娘だからじゃ。」

「呑き込まれた・・・」

「・・・うん。」

「ていうかそんなにやばいものなら原典を読まずに捨てればいいじやねえか。」

「大事なのは原典じゃなくて中身だから。原典を消してもそれを使いきかせちゃったら意味がないの。それに原点の処分は人間には無理。だから封印するとかしか意味がないの。」

「要するに連中はお前の頭の中の爆弾が欲しいと言つわけか。」

「10万3千刷の魔道書はいたちの推測通り世界を例外なくねじ曲げる」ことができる。だから。」

「てめえ!なんでそんな大事な話を今まで黙つてた!?!?」

いきなり怒鳴られたインテックスは半泣きになつた。

「だつて、信じてくれると思わなかつたし、怖がらせたくなかつたし、

それに・・・その・・・嫌われたくなかったし。」

「・・・まさかこんな小娘に舐められるとはな。」

「全くだ!! ネセサリウス? 10万3千冊の魔道書?
とんでもない話だつたし聞いた今でも信じられねえよ!!
だがな!! 僕にはこの右手がある、これがあればどんな魔術師が來
ようが

屁でもねえ!!。だから少しさは俺の事を信用しろ。」

さつきまで不安と言ひつ文字が頭の中を書き回つていていたイングリックス
だが
今まで少しだけ表情が穏やかになつた。

「じゃあ聞くけど私と一緒に地獄の底まで付いて来てくれる?」

「君の言ひ地獄がどれほどのかは知らないが・・・付き合ひてや
うひ。」

「ああその通りさ。地獄だらうが天国だらうがどこまでも付き合つてや
てやるよ。」

二人の言葉を聞いたイングリックスは今にも泣き出しそうな表情だつ
た。

「・・・『めんね、私のために。』

「気にするな、それが仲間つてもんだ。」

この世界に来て初めて満面の笑みを見せたイタチだつた。

「そりそり、そんなに泣いてると赤ちゃんと思われるぞ。」

この時インテックスの中で何かが吹っ切れたような音がした。

「ん？ どうしたんだインテックス？ 自分が赤ちゃんだつて認めるのか～？」

そう言つた次の瞬間インテックスは上条の頭に噛み付いた。部屋にはとてつもなく大きな断末魔が響きわたつた。

一方その頃、寮から遠く離れた場所でスタイルとが上条の部屋の内部を双眼鏡で観察していた。

そしてその隣には日本人と思われる黒髪の女性が立つていた。その様子はまるで金で雇われたスナイパーのようだ。

「インテックスは？」

黒髪の女性がスタイルに尋ねた。

「生きてるよ。」

さりげなくそう答えた。

「彼女に同伴していた少年と青年の身元は分かりましたか？」

「少年の方は上条当麻と言つてただの喧嘩つ早い学生のようだ。だがもう一人の赤雲黒マントに関しては何一つ掴めなかつた。」

「不明ですか・・・。

もし彼がここの人間じゃないとなると非常に不味いですよ。」

「だとしてもどうする？僕じゃ全然歯が立たなかつたしね。」

「なら今度は私が行きます。」

「大丈夫なのか？僕の見た感じだと短時間でイノケンティウスの弱点を見切る洞察力、聖人クラスの身体能力を持つている。あの態度からしてまだ強力な術を持つているみたいだつたしね。それに3つの黒い勾玉模様の赤い瞳には注意したほうがいい。あれには何かある。僕も手を貸すよ。」

「私を誰だと思っているのですか？あなたの手は借りません。私一人で彼らからインデックスを奪還してみせます。」

「・・・それにしても僕たちはいつまであれを引き裂き続けるのかな・・・」

スタイルがふてくされたように呟いた。

「複雑な気持ちですか？かつてあの場所にいたあなたとしては？」

「・・・いつものことさ。」

それから数時間の時が経ち学園都市に夜が訪れた。
その頃上条達は銭湯を済まし帰宅の途中だった。

「いやー、さっぱりした。」

「銭湯にいた女人達なんかみんないたちの事ばっか見てたけどな
んで？」

「知らん。むしろその理由を知りたい。」

それはあんたがイケメンだからだよ……といつか上条さんもあんな
風にちやほや
されてえ！…と頭の中で叫ぶ上条だった。

「ちょっと用事を思い出した。すまんが一人は先に帰つていってくれ。」

「え、用事ですか？」

「ああ、すぐ戻る。」

そう言つたイタチはどこかへ向かつていった。

そして都市の中をずっと歩いていった。

數十分ぐらい歩いて人気のない廃工場に着いた。
やがて廃工場の中心部に着いた途端足を止めた。

「そろそろか……。

もひ出てきたらどうですか、魔術師さん。」

そう言つた瞬間、物陰から黒髪の女性が出てきた。

「はじめまして、神裂火織と申します。」

第三の巻 魔術（後書き）

次回はイタチVS神裂です。
投稿は明明後日以降の予定です。

第四の巻 神裂火織

「率直に言います赤雲さん。彼女をこちらに引き渡してくれませんか？」

「その赤雲と呼ぶのはやめてくれないか？」

俺にはうちはイタチと書いた名前があるのでからな。」

「申し訳ありません。ではイタチさん、彼女をこちらに引き渡してください。」

出来ればもう一つの名乗りたくないのですが……。」

「魔法名を名乗りたくないか……つまり無駄な争いはしたくない」と？

魔法名と書つのは魔術師達が殺し合つをする時にだけ名乗る事が許されている。

それを名乗らないといつことは争いをしたくないと書つ意味なのかもしれない。

「まあそんな感じです。」

「なら……断ると書つたりじつあるつもりだ？」

そう言つた瞬間神裂は刀に手を差し伸べ、居合切りのよつたモーションをとつた。

すると突然鎌鼬のような斬撃が発生しイタチの後ろにある機材をまつぶたつに切断した。

「・・・隨分荒っぽいな。

だが、ワイヤーの斬撃ごときで俺が引くと思つてゐるのか?」

たつた一度とは言えイタチはさつきの斬撃をすでに見切つていた。

「・・・たつた一度見ただけで七閃の仕組みを看破するとはやりますね。ですが今度はあなたに放ちます。

ズタボロになりたくなければ引き渡すと承諾してください。」

「・・・悪いが承諾することはナンセンスだ。」

「よひしーのですか?なら私はあなたを殺してでも承諾させます。」

「なら・・・」

「」でイタチの雰囲気が変わった。

「その前に俺がお前を殺す・・・。」

両者に間にはただならぬ空気が漂つていた。
それはまるで宮本武蔵と佐々木小次郎が己の命を掛けて闘つような

感じだ。

しばらくして機材から水滴が落ちた音がしたとき両者共動き出した。

この時、闘いの火蓋が切つて落とされた。

まず最初に攻撃をしたのは神裂の方だ。

七閃と呼ばれるワイヤー斬撃をイタチに放つた。

イタチはそれを軽々とかわして空中から神裂の懷に入り込もうとした。

それを予測していた神裂はワイヤーを操作してイタチに向けた。

いくらイタチでも空中は身動きができないと踏んだからである。

神裂の読み通りワイヤーはイタチに直撃した。

しかしその瞬間イタチの体が丸太に変わった。

それを見た神裂は驚き、急いで辺りを見渡した。

そのスキを付いてイタチは防御が手薄の肌が露出している腹目掛けで蹴りを放った。

だが神裂は蹴りをかわしてカウンターをした。

イタチはそれもかわし、顔を狙つて拳を放った。

神裂はそれもかわしイタチ目掛けで蹴りを放った。

こんなふうにイタチが攻撃すれば神裂はかわして反撃をし、神裂が攻撃すればイタチもかわして反撃をするという攻防がしばらく続いた。

埒があかなくなつた両者は一寸距離をとり、そのまま睨み合いが続いた。

「・・・どうやらまだ俺を殺すほどの実力は出してないようだな。まずは俺の実力を確かめてからと言つ事か？」

「それはあなたとて同じことでしょう？

なぜシャリンガンとこうのを使わないのですか？」

「・・・写輪眼の事を知つていたとはな・・・。

といつゝとはあのスタイルとか言つ擬似神父と仲間と言つことか？」

「スタイルはれつとした神父です。擬似なんかではありません。」

「まあ・・・そんなことはさておき・・・。」

イタチは両目を閉じ、再び両目を開いた。

その時には写輪眼を発動していた。

・・・・・あのがシャリンガンですか・・・用心しなくては。

神裂はそう頭の中で呟いた。

「少し本氣を出させてもらひ・・・。」

「ニニドイタチの空氣がさらに変わった。

「どうぞお構いなく・・・。」

イタチは超スピードで印を結び始めた。
そして印を結び終えると・・・

「火遁・豪火球の術」

イタチの口から巨大な火球が吐き出された。
その火球は神裂目掛けて一直線に飛んでいった。

ワイヤーが使えないと判断した神裂は手持ちの大刀“七天七刀”的水の術式で対抗した。

水の術が豪火球を一掃してイタチの立っている場所に爆発が起きた。
しかしイタチはすでに神裂の背後に回り込み、後頭部を狙つて回し蹴りを放とうとした。
しかし・・・

「何ども同じ手にかかるとお思いですか？」

突然イタチの動きが止まつた、見てみると体中にワイヤーが巻きついていた。

「同じ手を使われてやられるほど私は甘くありません。」のまま炎の術式を使えばあなたを焼き殺すことなどが出来ますが、降参するのであれば話は別ですが……どうしますか？」

「……なら一言いいか？」

「別にどうぞ。」

「自分の体を見てみたほうがいい……。」

「何を言っているのかさっぱりですが……まだ強がるといつのならあなたを火炙りにします。」

「もう一度だけ言つ……自分の体をよく見てみたほうがいい。」

イタチの言われるがままに自分の体を見てみると

「……これは……一体……？」

なんとワイヤーでグルグル巻きにされたのはイタチの方ではなく神裂だった。

目の前の出来事に神裂は戸惑いを隠せないでいた。

「……もう少しで自分を火炙りにする所だったな。」

「そんな……あなたをワイヤーで縛り上げたはず……なのにどうして私が……！」

「幻術だ。」

「げ・・・げんじゅつ?」

「その名のとおり相手に幻覚を見せる術だ。

お前は俺の目を見た時から既に幻術に掛かっていたと言つわけだ。」

「しかし・・・こいつ目を・・・!」

思い返していたらすぐにひらめいた、目があったのはイタチが背後に回り込んだのを狙つてワイヤーを操作したときである。

「・・・あの時既に幻術にはまつていたと言つわけですか。」

「せいでじつある?」

このまま殺されるか知つてることを全て吐き捨てるか、どちらか選ぶがいい。」

「この程度のワイヤーで私を捕まえたつもりですか?こんなワイヤーなどすぐに・・・え!?」

普段なら神裂はこんなワイヤー程度簡単に引きちぎれるがなぜか思うように

力が入らず、ワイヤーはちぎれなかつた。

「俺が何の対策をしていないとでも?ついでに金縛りの幻術も掛けておいた、何か見えるはずだが?」

言われたとおりに見てみると神裂の体にはたくさんの杭が突き刺さつていた。

神裂には敗北フラグがつきました。

「さて・・・質問の答えはなんですか？」

「・・・これが私の全力だとでも？甘く見られては困ります。」

たつたさつきまで身動き一つ出来ないでいたが、急にワイヤーのちぎれる音がした。

「救われぬ者に救いの手を”Salvereo”！！！」

金縛りの幻術”魔幻・枷杭の術”を力で強引に破つてみせた。近くにいては危険だと判断したイタチは空中でバク転しながら後ろに下がった。

「さつきから普通の人間とは違つと思っていたが、まさか俺の幻術を力で破るとは・・・化け物だな。」

「それは褒め言葉として受け取つておきましょう。ですが私に魔法名を名乗らせるとは大したものです。なのでここからは本氣で行かせてもらいます。」

神裂は目を閉じ刀に触れると急に静かになつた。

イタチは何かが来ると警戒をしながら「輪眼で目視し続けていたが・

・

バシュ！！

気がついたら神裂は刀を振り抜いていた。

イタチの身体から大量の血が噴水のように噴き出した。

それと同時にドサッ！と言う音をたてながら俯せに倒れ込んだ。

「・・・これが七閃より上位に達する、真説の唯閃。ですが急所ははずしてあります、すぐ回復させますので」安心を。

「

そう言つて神裂が後ろを振り向くと、いきなり胴蹴りを喰らつた。蹴りを喰らつた彼女は壁に押し付けられたが、すぐに体制を立て直そうとした。

しかし足を強く踏まれ、腹に強烈な拳を打ち込まれ、両手を強く押さえつけられるなどスキを与えない速やかな攻撃で完全に動きを封じられた。

「唯閃を喰らつて・・・大怪我をしたのではないの・・・ですか？」

「喰らつたのは俺の分身だ。

とはいえ少しでも遅れていたらやられていたがな・・・」

そう言つた後に少し離れたところで倒れているイタチがたくさんの鳥となつてどこかへ飛んでいった。

このまま暴れられるのはまずいと悟つたイタチは催眠眼で眠らせた。神裂はそのまま眠つてしまつた。

「・・・何とかなつたか・・・」のまま暴れられたら万華鏡、いやアレを使わざるを得なかつたかもしけんな。

神裂の表情が少しだけ変わった、どことなく悲しそうな表情だ。

「・・・分かりました。それでは全てお話ししましょう。」

「全てを話すと言つのならな。」

「・・・本当に彼女から手を引いてくれるのですか?」

「事情によってはインデックスを引き渡し、あの娘の事は忘れよう。」

「質問だが、なぜあの娘を付回す?」

「無駄だ・・・武器はすでにこの手にある。それにワイヤーにチャクラを流してお前の魔力を乱している。力を出すことや解放することなどできないぞ。」

この時点で彼女は手も足も出ない状態だった。

「気がつきましたか?」

「・・・」

イタチはワイヤーを切断し、回収していた七天七刀を神裂に返した。

「私はイギリス正教、必要悪の教会所属の魔術師です。」

「必要悪の教会だと? それじゃあ貴方は……。」

「そうです。私は彼女の同僚にして、大切な親友なのですよ。」

イタチは少しだけ驚いた、まさか親友が親友を痛めつけていふとは思わなかつたからである。

「・・・インデックスを追い回しているのは、それでもしないと死んでしまつ、

または上から命令されて仕方なくやつてゐるのか?」

「前者です・・・。」

「死ぬだと? どういう意味だ?」

「完全記憶能力・・・。」

彼女は膨大な量の魔道書をその完全記憶能力で記憶しています。

ですが、結果として彼女の脳の容量の85%が、魔道書の記録で埋め尽くされてしまつたんですよ。

だから彼女は残りの15%しか脳を使えない。

しかし完全記憶能力を持つ彼女は、その15%さえも、木の葉の形や色など、如何でもいい記憶で埋め尽くしてしまつ・・・。

だから彼女は1年ごとに記憶を消さなければ、脳がパンクして死んでしまう。

彼女が私を親友と気づかないのは当然です。

彼女には1年前からの記憶が消されているのですから。私たちの手

で・・・。「

神裂の表情には、悔しさ、悲しさなどが感じ取れた。
しかしそういう感情を殺してインテックスの記憶を消さなければならぬ辛さ。

イタチはなぜか昔の自分を見ているような気分だった。
里の平和を維持するために自分の一族を全員抹殺しなければならぬと言う、

残酷な任務。

だがイタチは己の感情を殺してその任務をやり遂げた。
だが平和のために任務をやり遂げたとはいえその時の悲しみや辛さは計り知れなかつた。

イタチは神裂に同情出来るような気がした。

しかしイタチは自分の心の内を伝えるため無理矢理口を開いた。

「神裂さん・・・あなたの気持ちは痛いほど分かりますよ。
・・・仲間や親友を手にかける感覚はとても口で言い表せるようなものではないですからね。
だが少し見当違いをしているようだ。」

第四の巻 神裂火織（後書き）

今回の話でイタチの過去を書いていたらなんか涙が出てしました。
後神裂のやられ方なんですが、本気で暴れる前に行動を停止させられたと言つ事です。

なので決して神裂は弱くありません。

それと明日から塾が始まるので次はいつになるかわかりません。
暇があれば投稿します。

第五の巻 真実

闘いが終了してから數十分後、イタチと神裂の二人は上条宅を目指してビル群を飛び回っていた。

「本当にこの方向で大丈夫なのですか？」

と言つより・・・なぜ私たちが鳥の後をつけなければ・・・」

「帰り道に迷わないようこいつに当麻君の後をつけさせておいた。ただそれだけだ。」

「しかし鳥の後をつけるなんて変な気分なのですが・・・」

イタチは神裂の愚痴を無視しながらただひたすら家を田指して飛んだ。なにげない会話をしながらも一人の表情は少し焦つてこるようだつた。

その理由は數十分前にさかのぼる。

「見当違い……？ それはどういう意味なのですか……？」

半泣き顔の神裂は尋ねた。

「記憶にも色々あつてな。

言葉や意味を司る意味記憶、運動の慣れを司る手続き記憶そして想い出を司るエピソード記憶など色々あるわけだ。」

「何が言いたいのですか？」

「要するにいくら知識を積み込んでもそれで脳がパンクして死ぬなんてのは絶対有り得ない。

元々人間は140年分の記憶が可能だ。」

「じゃあつまり私達は上層部の嘘をまに受けて、馬鹿正直に彼女の記憶を奪つてきたと言うのですか……。

まさか科学と魔術に無縁な貴方が解明するとは……皮肉ですね。」

神裂は泣いているが顔からは悔しさと怒りが感じ取れた。

インデックスの記憶を一年周期で消さなければいけないのは10万3千冊の魔道書により脳が圧迫されているからではない。

その事実を知ることが出来れば彼女を救う事が出来たかもしないからだ。

「……話を戻すが。」

ここでは場の雰囲気が変わった。

「インデックスの記憶を消さないと死ぬ。

これは事実ですか？」

「・・・あの子の記憶を消す直前、突然発作が襲つたのです。しかし記憶を消したら発作がおさまりました。」

「つまり脳は暴発しない、だが発作がインデックスを襲う。さつきまでは物に飛びついて噛み付く事が出来る程の元気。となると思いつく原因はただ一つ・・・」

「10万3千冊もの魔道書は上層部にとつて恐れの種。それをコントロールする彼女は強大な存在。

彼女の裏切りを恐れたイギリス清教が彼女に魔術的な首輪を用意して魔力を生成できない状態にし、更に一年ごとの記憶を消すことで彼女を管理しようとした

・・・・・何とも許し難い話です。

しかしあの子の体を調べるより他はありません。

ですが”歩く教会”がそれを邪魔します。」

「その心配はない。

なぜなら昨日当麻君が”歩く教会”を右手の力で破壊してくれた。おかげで手間が省けたと思うが?」

「ちょっと待つてください、破壊したとはどういう意味です?」

「彼には”幻想殺し”と言つ異能の力なら何でも無効化するといった奇妙な力を右手に宿している。

その力で”歩く教会”を破壊したと言つわけだ。」

「・・・あの”歩く教会”が、どうりで私の攻撃通るわけですね。」

「人が会話をしている時、どこからか一羽の鳥がイタチの肩に降り立つた。

しばらく鳥と会話をしていたイタチだが突然険しい表情になった。

「神裂さん、大変な事になつた。」

「一体どうしましたか？」

「インデックスが倒れたらしい・・・それも貴方がさつき言つたとおり発作で。」

「なんですかー!？」

神裂の顔が蒼白になつた。

「急いで当麻君の家に向かうのですぐ準備をしてください。」

「分かりました、スタイルにも連絡します。」

「その必要はない、彼も一緒にいるよつだ。」

「そうですか。」

「あまり時間がない、少し飛ばしますが大丈夫ですか?」

「フツ、聖人の身体能力を舐めてもらつては困ります。私なら建物の上を飛ぶことぐらいたやすいですよ。」

「それもやうだな。」

「」で二人はイタチの鳥をつけながら超スピードでこの場を後にした。

そして現在に至るわけである。

途中「じやん」と叫ぶアンチスキルや「ですの」と叫ぶ風紀委員に追いかけられたが鳥分身や幻術とかで何とかやり過ごした。しばらく飛び回った所で上条が暮らしている寮に着いた。エレベーターや階段を使つたら時間がもつたいたいと思つたイタチと神裂は一気に数階までジャンプした。

そして上条宅の扉を蹴飛ばして入つてきた。

「イタチさん！」

「神裂！」

部屋のベッドに発作で苦しむインテックス、部屋の隅っこで固まつてる上条、インテックスの記憶を消そうと準備しているスタイルがいた。

「神裂！……なんでこの男と一緒にいるんだ！……まあいい早く記憶を消すぞ。」

「待つてください、あなたがたに話があります。」

「話だと？」

神裂はスタイルと上条にイタチが話した事を全て打ち明けた。それを聞いたスタイルと上条は驚愕した。

「それじゃあ教会は僕達に嘘を？・クソツ、なんてことだ！」

「ああ、ひでえ話だぜまつたくーイングテックスを何だと思つてやがるーー！」

一人を怒りをあらわにしていた。

特にスタイルの方が悔しさや怒りが強く出ていた。

「それで、この子を縛つてこる首輪はどうあるんだい？」

「それは俺に任せてもらおう・・・。」

やつぱりイタチは輪眼でイングテックスを観察した、すると・・・

「・・・当麻君、この娘の口の中に右手を突っ込んでくれ。」

「ええつーー？」

「おーおーまさか殺すきか！？手が付けられないから殺すとやつの
かーー？」この悪魔「」

スタイルは最後まで言つことなくイタチに殴られて吹つ飛んだ。

「少し静かにしてくれないか？正直耳障りだ・・・。」

睨まれたスタイルは舌打ちしながら黙り込んだ。

「イタチさん、この少年の右手をイングテックスの口の中に入れる言
うのなら

何か見つかったのですか？」

「ああ、喉元に奇妙な刻印が見つかった。そういう訳だから当麻君。」

「ああ分かつたぜ。」

上条はインデックスの口の中に手を突っ込み、刻印に触れた。この時だれもが一件落着と思いこんでいた。

しかし上条が喉元に触れた瞬間謎の力で吹っ飛ばされた。それと同時にインデックスは黒いオーラを纏い立ち上がった。

「警告、第三章第一節。Index - Librorummu - Prohibitorum。

第1から第3までの全結界の貫通を確認。

再生準備・・・失敗。自己再生・・・不可能。

現状、十万三千冊の書庫の保護のため、侵入者の迎撃を実行します。書庫内の10万3千冊により、結界を貫通した魔術の術式を逆算・・失敗。

該当できる魔術の詳細は不明。

術式の構成をあばきます。

・・・侵入者に対して最も有効な魔術の組み合わせに成功。」

するとインデックスの口から結界が発生した。

「これより特定魔術”セントジョージの聖域”を発動。侵入者を撃退します。」

気が付けば黒い稻妻のようなものが結界に張り巡らされていた。

「・・・どうやら魔術が使えないと言つのも嘘だつたようだな。冷静に考えてみればそんな重要な事を上層部が貴方達にそう易々と

教える訳もない・・・か。

そうなればインデックスを縛っている魔術を破壊するより手はない。

「

「言われなくても」

「心得ているつもりです！！」

「インデックス、必ずお前を救つてやる。」

イタチ 上条 ステイル 神裂の4人は戦闘態勢に入った。

第五の巻 真実（後書き）

次回も時間があれば投稿します。

第六の巻 万華鏡写輪眼（前書き）

今回は戦闘シーンのみです。
それではお楽しみください。

インデックスの身体が青白く光り出した、それと同時に蒼白い閃光が4人に、轟音を立てながら向かつた。

上条は右手を突き出して無効化をはからうとした。しかし普段ならとっくに打ち消されてるはずなのだがなぜか打ち消せないでいた。

それ処か次第に押され始めていた。

そこへ、

「曖昧な可能性などどうでもいい。

あの子の記憶を消せば取り敢えずはそれで命が助かる、僕はそのためなら誰でも殺すいくらでも壊す。

そう決めたんだ・・・ずっと、前に・・・。

「取り敢えずだなふざけやがって。

そんなつまんねえ事はどうでもいい 一つだけ答える魔術師。お前らはあいつを助けたくないのか！？

この言葉にスタイルは度肝を抜かれたような感覚になつた。

「お前達はずつと待ち続けていたんだろ！？

インデックスの記憶を消さなくとも済む、インデックスの敵に回らなくとも済む。

そんな誰もが笑つて誰もが望む最高なハッピーエンドつて奴を！？今まで待ち焦がれていたんだろ！？

こんな展開になるのを、何のために痛みを背負つて来んだ！？

お前達は命を掛けてインデックスを守りたいとは思わないのかよ！

！」

戦闘態勢に入ったとはいえたまだ決心がついてなかつた神裂とスタイルは上条の言葉で目が覚めたように決心が着いた。

もう迷いはしない・・・命に換えてももあの子を守つてみせる！！といつた意志が神裂とスタイルの一人の顔からそれが感じ取れた。一方さつきから押され氣味の上条はそろそろ限界に達していた。彼の右手からは少しづつ血が流れていった。

「s a l v e r e · · · 0 0 0 ! ! !」

このままでは上条が危ないと悟つた神裂はワイヤーで畳をひつペ返した。

それによりインテックスはのけぞり、白い閃光の軌道がずれた。閃光は上条の部屋の天井を貫通して遙か上空に進んでいった。天井が壊れたと同時に白い羽があちこちにを宙を舞つていた。

「！」・・・「これは一体？」

羽に触るひとつ上条は手を差し伸べようとしたが、

「うかつに触るな・・・。それに一枚でも触れたらただでは済まない。」

イタチが引き止めた。

「これは・・・ドラゴンブレス！？」

伝説にあるセントジョージのドラゴンの一撃と同義です。イタチさんの言つとおりたつた一枚でも触れたら大変です！！」

さつきまでのけぞつていたインテックスだが体制を立て直して再び

ドラゴンブレスを発射した。

それに光線の範囲がさつきと比べたら数倍以上もあった。

上条はさつきのダメージで右手に大怪我を追つてしまつたので対応が遅れていた。

巨大な光線によつて上条達は一掃されそうになつた。

この時イタチはある考え方をしていた。

上層部に振り回された拳句、インデックスを救えずに死ぬなんてのは間違つてゐる。

なんとしてでもこの人たちの願いを叶えさせてあげたい・・・。

それを分かつた上で、

「万華鏡写輪眼」

イタチは万華鏡写輪眼を発動した。

だがこの時違和感を感じた、普通の万華鏡と違う・・・そんな感じだ。

しかし今は考えている暇はないので自身の持つ絶対防御である”須佐能乎”を発動。

赤い炎の様なオーラをまとい天井を破壊して巨大な骸骨が浮かび上がつた。

そして筋肉の組織のようなものが骸骨を覆い尽くし、最終的には鬼のような顔をした巨人になつた。

イタチは巨人の左手に持つてゐるハ咫鏡で上条達を守つた。

その衝撃の余波が部屋を次々と破壊していつた。

「今だ！！走れ当麻君！！」

なんとか突破口を作つたイタチは叫んだ。

そして頷いた上条は猛獸のような雄叫びを上げながらインデックスの方へ走つていつた。

「警告第6章13節、新たな敵兵を確認。

戦闘思考を変更、術式の逆算・・・失敗。

現状最も危険な敵兵上条当麻の破壊を最優先します。」

インテックスは無数のドラゴンブレスを上条に放った。

邪魔はせんとイタチは右目を一旦閉じた。

しばらくして右目から血が湧き出し、

「天照！！」

右目を開いた瞬間黒炎が発生し、ドラゴンブレスを受け止めた。
しかしまだ光線はまだ大量にあった。

元々イタチは目をつぶれば黒炎を鎮火できるがコントロールは出来ない。

だが今なら黒炎をコントロール出来る気がしていた彼は、

「炎遁・・・加具土命」

イタチはうちは一族ですら制御不可の天照のコントロールに成功した。

内心はかなり驚いているようだったが。

そして黒炎を操作して巨大な盾を作り、ドラゴンブレスを一気に受け止めた。

黒炎と閃光の激しい衝突が長時間続いた。

天照は対象が燃え尽きるまで消えないが伝説の魔術と言つこともあつて中々

燃やし尽くせないからである。

上条はそのスキを狙つてなんとかインテックスに近づく事に成功した。

そして痛みに堪えながらも右手を強く握り締めて突っ込んだ。

「神様・・・この世界があんたの作ったシステムだつて言つなら。まずは、その幻想をぶち殺す！！」

上条はインデックスの頭に触れた。

するとさつきまでの禍々しいオーラなどが消え倒れそうになつた。

「警・・・告最終・・・章第0・・・首輪・・・致命的・・・破壊。再生・・・不可。」

インデックスはその場に倒れ込んだ。

それと同時にイタチは万華鏡から通常の写輪眼に戻した。須佐能乎の巨人は消え去り黒炎も徐々に鎮火していった。しかしそれと同時に膝を勢いよくついてしまつた。

恐らく須佐能乎と天照を長時間使用した事による極度疲労が原因だろつ。

「大丈夫ですか？」

心配した神裂がイタチに声をかけた。

「大丈夫だ・・・、それより・・・あの娘は・・・？」

自分の事よりインデックスが気になつた彼は尋ねた。

「大丈夫だ、もうこの通り気持ちよさそうに眠つていい。」

上条は心配すんなと言つ感じで言つた。

「そ・・・そつか・・・よへやひ・・・た・・・・・な。」

力尽きたイタチはひとつその場に倒れ込んでしまった。

第六の巻 万華鏡写輪眼（後書き）

なんとか時間が取れたので更新します。
しかしこれからもこのようなことが続くかもしれないのですいませ
ん。

それと炎遁・加具土命を使つたといつことはもう誰の万華鏡とすり
替わつたか分かつた方が大勢いると思つ。

あれから2日後、イタチは冥土返しの病院で目が覚めた。

「どうま。いたちが起きたんだよ！」

インデックスに呼ばれた上条は何?と言しながら急いで振り向いた。

「うーは・・・どーだ?」

「病院だぜ。あんた2日間も寝ていたんだ。

しかしあの時は俺も驚いたぜ、いきなり倒れたんだからな。」

「・・・万華鏡の瞳術は強力だがその分チャクラを大量に使う上に視力が低下するリスクがある。

須佐能乎の場合更に全身の細胞に痛みを与えるがな。」

「まるで諸刃の剣だな。

じゃあ今はあまり物が見えないのか?」

「・・・いやそうでもない」

「へ?何でだよ。」

「さあな、俺が知りたいぐらいだ。」

この時はこう返したが、イタチ自身実はその理由がほとんど理解していた。

だがえて知らない素振りをした。

ちょうどその時ドアを叩く音がし、失礼するよと言ひながらカエルみたいな顔をした老人が入ってきた。

彼は冥土帰しと言つてこ病院にいる凄腕の医者。

あまりに凄腕なので”冥土帰し”という異名を持つ。どんな病気・負傷であつても最後まで患者を見捨てず、あらゆる手段を用いて治療してしまうといつ。

「思ったより早く回復したね。体の具合はどうかな？」

「おかげさまでな。だいぶ良くなつた。」

「そうかね。後それから赤い髪をした青年から君宛の手紙を預かつているのだが。」

そつと冥土帰しはイタチにスタイルの書いた手紙を渡した。封を開けてみると、

挨拶は無駄なので省かせてもららうよ。

全くよくもやつてくれたなこの野郎！…と言いたいところだけどその個人的な思いのだけをぶつけてしまつと世界中の木々を燃やし尽くしても紙が足りないのでやめておくよ。

必要最低限の礼儀として、手伝つて貰つた君にはあの子とそれを取り巻く環境について説明しておく。

イギリス正教は大至急彼女を連れ戻したがつてはいたけど、僕達を騙したことについて問い合わせたらあつさり現状維持と来やがつた。実際には様子見ということでいいのかな。

僕個人の意見としては一瞬一秒でも君がインテックスのそばにいる

のが許せないわけだけど。

ちなみにこれは僕達が諦めてあの子を譲るという意味ではないよ。

僕達は然るべき情報を集めてきちんとした装備をし次第あの子の回収に向かう。

寝首をかくというのは趣味ではないが、首を洗つてまつているがいい。

最後に、これは上条当麻にも伝えてもらいたい。

スタイル・マ

グヌス

読み終えた瞬間、ボン！と音をたてながら手紙が破裂した。イタチ以外の3人はうわっ！と言ひながら驚いた。

「・・・な・・・中々過激なお友達だね・・・。

手紙に液化爆薬でも仕込んであつたのかな・・・？

まあ何にしろ君はもうほとんど回復してるからいつでも退院出来るわけだが。

「そうか。」

「本当に大丈夫なのか？」

「なあに心配するな。」

そう言つとイタチはそばに置いてあつたマントと衣装を持って更衣室に向かつた。

1・2分くらいした後に戻ってきた。

「それから暫く渡す物がもう一つあるのだが。」

セツヒツと戻り戻しは懐から小さな紙をイタチに渡した。

「これまたロボだ。持つてこくとこ。」

「すみませんね。わざわざ俺のため。」

「礼なさいさよ。」

戻り戻しと端屋から出ていった。

「わい・・・俺達もそろそろ行へか。」

「だな。」

「ねえねえとうま。」

「なんだインテックス?」

「いたの退院祝いとドドンかで、飯を食べに行くんだよ。」

「退院祝いねえ・・・。」

「つべこべ話すのへ行くのー。」

「俺は別にでもここのが・・・。」

「ほひ～、イタチさんもこいつ歸つてゐる訳だしね。」

「だがたまにはそつこいつのもいいかもしない。
丁度甘味処に行きたかつたところだしな。」

「・・・え・・・」

「じゃあそつこいつわけで出発なんだよーー！」

インテックスはステップしながら、イタチは静かに上条から少しずつ離れていった。

「ふ・・・不幸だ。」

上条はどんよりとした空氣を放ちながらトボトボ歩いていった。
なぜならインテックスを店に連れていくと物凄い料金になるからだ。
それに今上条の財布の残高は532円しか残つていらない。
もちろんイタチとインテックスはその事を知らない。
インテックスはそんな事気にしそうにないだろうが・・・

一方、上条達が病院を出た頃ステイルは窓のないビルの最上階にいた。

そこには大きなビーカーのような物の中に男にも女にも、子供にも老人にも見える白髪の人間がいた。

この人物こそ伝説の魔術師、世界最高の科学者、学園都市の最大権力者、学園都市統括理事長のアレイスター・クロウリーである。

「ステイル・マグヌスここに来た人間は皆私の在りかたを観測して同じ反応をするのだが、機械がすることをわざわざ人間がする必要はないだろう?」

「はい・・・アレイスター統括理事長。」

「君を英國から呼び戻した理由は既に分かっているだろうが・・・、まずい事になつた。」

「吸血殺し・・・ですね?」

「いるかどうかも分からない・・・、とある生き物を殺す能力を有する少女が監禁されている。」

問題なのは、本来この都市に立ち入ってはならない魔術師が関わつ

ている事だ。」

「魔術・・・師ですか？」

「魔術師の一人や二人抹消する事は容易い。

問題は我々科学サイドの人間が魔術師を倒すと言つて一点にしきる。科学サイドと魔術サイド、お互いそれぞれの技術を独占し合つてゐるからこそ今の世界のバランスがある。

仮に超能力者を統べる学園都市が魔術師を倒すと言つて張ればどうなるかは想像がつくだろう?」

「なるほど・・・魔術側の僕が魔術師を潰す分にはなんの問題もないと言つことですか?」

「だが私は・・・魔術師の天敵となる物を所有している。」

「幻想殺し・・・ですか?しかし超能力者を使うのはマズイのでは?」

「問題ない、あれはただのレベル0。

言わば無能力者だ、価値ある情報は何ひとつもない。

君と行動したところでこちらの情報が漏れる事はない。」

「それは・・・あの少年と行動を共にしろと言つわけですか?」

「あれにはそちらの技術を再現するほどの才能はない。故に君たちの情報が漏れることもない。」

「・・・分かりました、しかし吸血殺しなんて本当に存在するのですか?」

「存在するのであれば、ある生き物の存在も証明してしまつ。」

「吸血鬼・・・」

「オカルトは科学サイドではなく君達の領分だと想つただがね?」

ステイルはそう言われるここから立ち去つていつた。

「うちはイタチ・・・君は私に面白い物を見せてくれた。
特に写輪眼と言うものは非常に興味深い。
くれぐれも私を失望させないでくれたまえ。」

アレイスターは口元を歪ませながら呟いた。

第七の巻　冥土帰し（後書き）

遅くなつて申し訳ない。

今度はもつと早くなるようにします。

余段

最近知つたのですがこの小説を何と友人達が読んでいたんですね
www。

知つたときには皆で大笑いてしましたwww。

全然アイディアが浮かばなかつたのでまた遅くなつてしましました。
・・すいません。

それと結構長くなつてしまつたので、最後の方は結構省略します
自分は文章力が下手だと感じているので、もしかしたら今回の話は
面白くないかもしません。
なにせ他のキャラが難しいので・・・

「まさか甘味処に行つただけでも￥あんなにかかるとは・・・
はあ・・・不幸だ。」

上条は飢餓に苦しむ農夫のような顔+どんよりとした雰囲気を出し
ながらそう呟いた。
上条より前に歩いていたインデックスは突然看板の前で立ち止まつ
た。

「どうしたインデックス? 何突つ立つてんだ?」

上条が看板を見上げてみると、そこにはアイスの絵が描かれていた。

「おい・・・まさかお前。」

上条が話しかけた瞬間インデックスはものすごい勢いで振り向き、

「どうまーー私は一言も暑い だるい 疲れたとは言つてないかも
!!」

まして他人のお金を使いたいと考へた事もないし結論としてアイス
を食べたいなんてこれつポツチも思つてないもん!!」

「分かったよ。

そんなにアイスが食べたくばエアコンのきいた部屋で食べたいと言
えばよからう。」

「どうまーーこの服は主の教えを主格化したものであつて、
私は一度たりとも暑苦しいとか 辛いとか 面倒くさいとか考

えたことはないんだからね……」

このよつこ上条とインデックスは「ゴチャゴチャ言い争つていた。上条があ～だこ～だと言えればインデックスはそれに反論し、インデックスがあ～だこ～だと言えば上条も反論する、そんなやりとりが続いた。

「……元気がいいな……

そう思いながらイタチは2人の事を眺めていた。

口喧嘩とはいえなぜかとてもいい雰囲気に思えていた。

「ちなみに私は修業中の身だから一切の嗜好品の摂取は禁じられているんだよ。」

「やうかそ～か、じゃあ無理にアイスを食べる必要もないな。イタチさん行こ～ぜ。」

上条はそつ言つてインデックスから離れよつとしたが、インデックスがいきなりつかんできた。

しかも物凄い鼻息を吹き出しながら。

「確かに禁じられているけどあくまで修業中だから完全なる振る舞いが出来ていたり出来ていなかつたり。

従つてこの場合誰かがアイスを私の口の中に放り込んでいく可能性があるとも言えるんだようまー。」

「……こいつって……本当にシスター？」

「うひひ～、また旗を立てよつとしとるんかいなーカミやん。」

「ホント相変わらず恨めしい奴だじゃー。」

そう言いながら現れたのは青髪の少年と金髪でいかにも不良と言つ感じの少年だつた。

一人は青髪ピアスといつて上条の悪友で学級委員を勤めている。もう一人は土御門元春とつて彼も上条の悪友である。クラスではこの3人組みの事を「デルタフォースと呼んでいたらしい。

「それで、そのちつこいの誰せよ?」

「もしかして女装少年? 女の子にしてはペッタント過ぎるしね」

この時インテックスは若干頭に血が上つた。

「あ、お前ら言つて良いことと悪いことがあるだろ……
いへり幼児体型だからって……」

そしてインテックスはこの言葉で更にイライラが増した。

「とつま……私は敬愛すべき謙虚なシスターです。
悔いがあるなら今しごとに聞いてあげてもいいんだよ……」

微笑みながら言つているが周りには黒いオーラが強く出ていた。このままではヤバイと悟つた上条は渋々アイスに向かつた。ところが向かつたアイス屋は何と休業中だつた。我慢できなくなつたインテックスは上条の頭に噛み付いた。彼のギャーーーーーと言つ断末魔が周りに響きわたつた。

「アイス アイス アイス」

「それじゃー『ゴチ』になるぜよ」

「まあ悪く思ひなよカ///やん」

「また奢るはめになるとほ・・・不幸だ」

うなだれきつて暗い表情のまま思わずそつ唇こいた。

「・・・君も大変だな」

「それを分かつてくれるのはイタチさんだけですよ・・・

アイス屋が休業中だつたので仕方なく近くにあつたフードマーレスに行くことにした。

とはいえ全部上条の奢りだが。

「『やつ言えばまだ』の人の事まだ何も聞いてへんけど。

お兄さん一体誰や?」

「「つちはイタチだ。」

「赤い瞳に黒い勾玉模様が3つとは、かわったアイメイクをしているやな~」

「ねえ皆来て来て。」

インデックスが呼んでいたのでそこへ行つてみると、

「う・・・」

「- - - - 何こいつ・・・怪しそぎるだり・・・

黒髪ロングで巫女服を着た少女が苦しそうに這いつくばっていた。

「あのー・・・どうかしましたか?」

怪しいとはいえこのまま放つておくのは変と感じた上条は話かけてみた。

「く・・・食いだおれた・・・。」

この時5人の間に沈黙が走った。
すかさずデルタフォースの3人はじやんけんをし始めた。
負けた奴がこの人の介護をするというルールで。
3人のあいこはしばらく続いたが上条が負けたので、上条がこの人の介護をする羽目になつた。

「あのー・・・食いだおれたって何?」

そう言われた少女はゴソゴソと音をたてながら割引券のような物を取り出して、それを上条に見せた。

「一個100円のフライドチキン……おトク用のクーポンが沢山
あったから。
とりあえず35ペースほど頼んでみた……。」

「おトクすぎだ……馬鹿……。」

「……。

やけ食い……帰りの電車賃600円。」

「それで?」

「全財産……500円。」

「その心は?」

「買はずぎ……無計画。だからやけ食い」

「つーかさ、それ以前に誰かから電車賃借りればいいだろ。」

「これを聞いた少女は何かをひらめいたように起き上がった。

「あーなるほど。その手があったか」

「おー……」いつは中々の美形ぜよ……。」

土御門は美人に会えた事に大喜びし、

青髪ピアスはニヤニヤしながら携帯で彼女の写真を撮つた。

「100円……貸して」

「あー無理無理、貸せないものは貸せない。」

「チツ・・・たかが100円ぐらい貸せないなんて」

少女は舌打ちしながら呟いた。

「たかが100円持つてないのはどこ馬鹿だよ！？」

「カミやん・・・」んな美形な巫女さん相手にストレートに言つなんて、成長したにやー。」

「美人・・・美人に免じて後100円」

「あのな・・・俺は甘味処+この3人に奢つたから貸す余裕はないの！！

分かる？」

「100円」

「うわー！こつち来たー！？」

「1・0・0・円」

「うわー、なんでこつちにもー」

「写真撮られた」

「えつ！？有料？お金取るんかいなー」

「へえー！」の巫女さんは顔も売るんだ

インデックスがイライラしながら呟いた。

「巫女さんではない」

いや・・・どう見ても巫女さんだろ!」

上条が大声でツツコミをいれた。

一
私
魔法使い

「ま・・・魔法使い？」

上条達（イタチ除く）はキヨトンとしたが、インテックスは机をガタン！…と叩きながら立ち上がり、

「魔法使い！？ 暗昧なこと言つてないで、専門と学派と魔法名などを名乗るんだよお馬鹿！！

大体その格好は何？巫女さんならせめて東洋風の占星術師や祈禱師のホラを吹かなきゃダメなんだよ！！

「ふーん・・・じやあそれで」

「なあインデックス、こいつが巫女さん改魔法使いだつてのは分かつたのからさー、少し黙つてて。」

「どうまーー私の時は態度が違うかもーー私の時なんか・・・服まで脱がしたクセに・・・」

「えつー? それってどひつて事やカミや・・・ん?」

6人が振り向いてみると、いつの間にかガラの悪そうな男達が集まつていた。

「誰ぜよ?」のおちやん達

「さあ」

5人が怪しんでいるさなか突然少女が立ち上がり、そして先頭にいた男に近づき、

「後100円」

そう言わると男は黙々とポケットの中から100円玉を取り出し、それを彼女に渡した。

「知り合い・・・なの?」

「塾の先生」

「塾の・・・先生」

100円を受け取った少女はこの場を去つていった。
それと同時に男達も・・・

「けど、なんで塾の先生が生徒の面倒を見んねんな?」

4人はただ静かにそれを見ていた。

「はあー・・・」

土御門達と別れた後、上条 イタチ インデックスの3人は寮に帰るために歩いていた。

「どうしたのどうま？」

「お前が服を脱がされたなんて言うから・・・一緒に住んでいるつ

てもじバレたら……

「う……だつて。あ……」

何かを見つけたインテックスは急に走って行った。

「とつまトイタチ……ねえ見て……」

言われるがままに見てみると、どなたかもうてくだをこと囁つれが書かれたダンボールの中に猫が入っていた。恐らく捨て猫だろう。

「ねえとつま……お願いがあるんだけど

「ダメ」

上条は何も聞かずにそう答えた。

「私はまだ何も言つてないんだよ……」

「言わなくとも分かるつづーの。
どうせこの猫を飼つてもいい? ……とか言つてもうだつたんだろう。
あいにくだが学生寮はペット禁止だ。

それに俺が猫を養つほどの余裕があると思つていいのか?」

「う、でもスフィンクス飼いたーい……」

「スフィンクスつて……早くもお前つけてんじゃねえ……
とにかくダメなもんはダメ……」

インテックスはまるでおもちゃを買つてくれと駄々をこねる幼稚園児みたいに上条に頼み込んだ。

そして上条はダメの一張り。

二人が言い争つてゐる間に猫は逃げてしまつた。

「あーあー、ビビッて逃げちまつたじやないか！」

「どうまの所為！！」

そう言いながらインテックスは猫が逃げていった方向へ走つていつた。

「おー、どうへんなんだよ」

上条はインデックスの後を追うとしたが、イタチに肩をつかまれた。

「ちょ、何すんだよー！」

「まだ気づかないのか？周りをよく見てみろ」

「周りつて・・・はつ」

辺りを見渡してみるとさうきまだ大勢いたはずの学生とかが二つの

「…」

「確か・・・ローンとか言う奴だったか?

あの子が離れたと同時に結界を張つたみたいだな・・・
人が一瞬で消えたと言つことは人払いの術か？」

イタチは冷静に周りを写輪眼で見渡した。

その結果ルーンと言つ術式である事が判明したようだ。

「だ・・・誰がそんな事を・・・」

「恐らくスタイルとか言つた男だろ?」

「スタイル・・・あの時あいつか！」

「その通りだよ」

そつ言いながら物陰からスタイルが出てきた。

「シャーリングガンだっけ・・・本当に便利な目だね。それは」

スタイルは若干褒める様な感じで言つた。

「2日ぶりだね・・・うちはイタチ、上条当麻」

「一体・・・何の様だ」

上条は睨みながら言つた。

「そんな怖い顔されても困るね。まあ、本来僕たちの関係はそういう風にいがみ合つものだろ?けどね。
たつた一度だけの共闘でひおつてもひつのはめんだからさ。」

スタイルは懐に手を忍び込ませ何かを引っ張り出すやうとしたところもうだ。

それを見たイタチはいつでも幻術をかけられるようスタイルの手にピントを合せ、上条は拳を強く握り締めて突撃の体制に入った。

「君達何か勘違いをしているようだけど、僕はただ内緒話をしに来ただけだよ」

「内緒話だと……？」

「そう、内緒話。受け取れ」

懐から出したのはファイルだった。

そしてファイルの中から10枚以上の紙が円を描くように出現した。

「三沢塾って進学予備校の名は知っているかな？」

「三沢塾……シヨアノ。1を誇るあの塾の事？
そこがどうかしたのか？」

「そこ……女の子が監禁されているから」

「監禁……？」

「どうやら今の三沢塾は、科学崇拜を軸にしたエセ宗教と化しているらしいですね。」

教えについては置いといて、その三沢塾が乗つ取られてしまった。

今度は正真正銘本物の魔術師、正確にはチヨーリッヒ学派の鍊金術師だがね。

その鍊金術師の名はアウレオルス・イザードと言つて3年前から行

方不明になつていた。

それが最近になつてひょつゝと姿を表したと聞つわけぞ。」

「な・・・何のために?」

「それは、三沢塾に囚われていた吸血殺しさ

「ティープ・・・プラシド?」

「その子が所有して居るある生き物を殺す能力や」

「ある生き物?」

「呼び方は色々あるけど・・・一般的によく知られて居る名は”吸血鬼”かな」

「吸血鬼!?!?」

上条の頭の中には人間の生き血を喰らつ怪物が浮かんだ。

「そんな化け物が本当に存在するのか?」

「僕達魔術師でさえはつきりとした詳細はつかめてない。

しかし吸血殺しとはその名の通り吸血鬼を殺す能力だ、なら先ず吸血鬼と出会わなければならない・・・

そのためには吸血殺しを取り押さえておくこととしたことはないんじやないかな?」

「何が言いたい?」

「僕はこれから三沢塾に特攻をかけて吸血殺しを回収する……
そうしないと不味い状況だからね。」

それから君達も一緒に来てもらひ、申し訳ないけど拒否権はないと
思つたほうがいい」

「勝手な言い草だな……それはお前の都合なのだろう?
なぜ俺達が手伝いをしなければならない?」

「そりだ! なんで俺達がてめえに付き合わなきゃいけないんだよ!」

「一つだけ教えてあげるよ、君達が拒否すればインテックスは即回
収と言う事になる。」

必要悪の教会が下した役は君達2人にインテックスが裏切らないよ
うにするための足枷さ。

つまり君達が従わないと足枷の意味はない」

「てめえ……それ本気で言つてんのか?」

「さあね……まあどっちにしろ僕について行くかついて行かな
いかは君達の自由だからね」

そう言つとスタイルはこの場を去つていった。
それと同時に人払いを解除した。

さつきまで姿形なかつた人影も次々と現れた。

「くそ……あの野郎、インテックスを何だと思つてやがる……」

拳を強く握り締め、怒りをあらわにしながら呟いた。

「今は冷静になれ……取り敢えずはあの子の安否だ」

「ぐ・・・

言わるがままに上条は怒りを堪え、インデックスを探すことにした。そして数十分探した結果一応インデックスを見つける事ができた。そして寮まで無事に着くことが出来た。

インデックスはスフィンクスを諦めたかと思つていた上条であったが、結局彼女はスフィンクスを隠していた。

また言い合いになつたが、観念したのか上条はスフィンクスを飼う事を承諾した。

そして適当に嘘を付いて2人は家から離れた、するとそこにはスタイルがいた。

「何やつてんだ？」

「あの子のためにイノケンティウスを置いていひと想つてね」

「じつやらインデックスを守るためにイノケンティウスを置いていくつもりのようだ。」

「僕達が三沢塾に行つてゐる間に他の魔術師が攻めてくるかもしけないしね

全く・・・世話が焼けるよ」

「お前・・・あいつのことが好きなのか？」

「な、ななな何を言つてるんだ！――あれは保護すべき存在であり、決して恋愛対象ではない・・・」

スタイルは顔を真つ赤にし焦りながら言つた。

「どうとにかくやつをと行くぞーーー！」

イタチと上条は何を焦っているのだか・・・と思いながらスタイルについて行つた。

「『』が三沢塾なのか？塾って言つからにはもっと小さい建物かと思つてたけど」

しばらく歩いて3人は三沢塾に到着した。塾とはいえ高層ビルのような建物だった。

「しかしホントにここに吸血殺しがいるのか？別に怪しくは見えないけど……」

「外見はな……だが建物自体が結界のようだ。それもかなり強力なやつのようだ」

「その通りだ、この建物には鍊金術師の結界が張られてるって訳さ」「その鍊金術師って強いのか？」

「アウレオルス・イザード……かのパラケルススの末裔さ君達は鍊金術師について何を知っている？」

「えーと、鉛を金に変えたり不老不死の薬を作り出すって奴か？」

「まあ……大体そんなもんさ。だが鍊金術師には本来究極の目的が存在する。それは世界の全てをシユミレートする。もし、頭の中で思い浮かべたものを現実世界に引っ張り出せるとしたら？」

「つまり……想像したこと有何でも引っ張り出せるとこうことか？」

「そんなの勝てるわけないだろ。」

「それじゃああれか？君はここで引き返すつもりかな？手伝う気があるのなら今のうちに吸血殺しの顔でも覚えておくんだね。」

「正直僕は東洋人の違いを見分けるのが苦手だけど」

そう言つてスタイルは写真を2人に投げた。

見てみると、その写真には見覚えのある人物が写っていた。

「姫神秋沙、そう言つた前だそうだ」

写真を確認した2人はスタイルについて行き、三沢塾に入り込んだ。中はいたつて普通で、学生などが行き来しているあたり怪しさはあるで感じられない。

「なんか・・・意外と普通だな」

「やつややうや、今も予備校として営業中なんだからね」

「ふーんって・・・なんだあれ?」

何かが目に止まつた上条は近くによつてみた。そこには血みどろなつた西洋の騎士を彷彿させるような物が置かれていた。

「これロボットだよな?」

「どうした? ここには何もない、移動したほうが賢明だと思つがとは言つてもこれは君にどうては珍しいものかもね・・・」

「え?、ロボットなら科学サイドの領分だろ?」

「何を言つてゐる、これは死体だよ」

第八の巻 三沢塾（後書き）

こんな内容で完璧だと思っていた俺の姿はお笑いだつたぜ。

第九の巻 錬金術師アウレオルス・イザード（前書き）

今回はちょっと自分の「ゴリ押し的な理論」が若干混ざつてます。
それにして、アウレオルスの口調は全然分からぬ。
正直これでいいのか・・・

第九の巻 錬金術師アウレオルス・イザード

「し・・・死体？」

いきなり死体だと言われても訳が分からなかつた。上条の顔からはそれが伺えた。

「恐らくローマ正教の13騎士団だらう。この様子じゃ全滅みたいだけど・・・」

「な・・・なんでだよ」

「ここには戦場だ、死体の一つや一つ転がっていてもおかしくないのだけど？」

「なんで・・・誰も気づかないんだ？」

「まあ・・・それは見てれば分かるよ・・・」

「？」

そう言った矢先、死体の隣を女子生徒が通り過ぎた。普通なら大声で助け呼ぶか身体が石みたに硬直するはずだが、この生徒は全然気にしていない、いや・・・まるでこの死体が見えていないう�な感じだった。

「ど・・・どうなつてやがる？ なんで誰も騒きたくない？」

彼の頭の中では何がどうなつているのか？ と直ひ思ひが右往左往し

ていた。

「表と裏だね・・・、表の住人である生徒達は裏の住人である僕達には気づいていない、そして僕たちも彼らに干渉することが出来ないのさ」

「結界が張られているのはこの建物だけなのか？」

「まあそりだらうね」

「なら話が早い・・・少しの間そこを動かないでもらおうか？」

イタチはそう言ひとたまたま通りがかつた女子生徒追つて外に出た。

「一体・・・何をするつもりだらう？」

「さあね」

上条とスタイルはただボーッと外で聞き込みをしているイタチを眺めていた。

そして20分くらいたつたところでイタチが戻ってきた。
なにやら成果があつたようだ。

「姫神とか言つたか？そいつの居場所が分かつた。
ただそこにいるかどうかは分からんが・・・」

「えつ、つまりどうこうことだよ？」

「そんな事も分からぬのか？」

「そう言われましてもね・・・」

「ほーその手があつたとはね」

スタイルは何が言いたいのか分かつたようだ。

「表だの裏だの、それはこの空間だけの話。

一旦外に出ればそんなのは関係ないと言つ事なんだろ?」

「まあ、そんな所だ。」

「それじゃ、案内してもらおうか。吸血殺しがいる場所に

3人は姫神がいる場所に向かつて歩き出した。
やがて食堂の前を通りがかつた。

「ふーん、科学宗教つてのは初めてだけど、いたつて普通だね
僕はてつきり教祖様の顔写真を貼つて拝んでいるのかと思つていた
よ」

「確かに危険度は低そうだな」

「・・・おっこから早く離れるぞ」

険しい顔をしながらイタチは呟いた。

2人は最初は訳が分からなかつたが、スタイルだけはすぐに理由が
分かつた。

前を見てみると生徒達が2人の事を不気味に見つめていたからだ。

「これはまずいかもね・・・」

苦笑いをしながらスタイルが呟いた。

「えつ、ちょっと何がどうなってんだ？」

「とほけるなよ、表の住人であるあいつらが裏の住人である僕達が見えるはずがない」

「熾天の翼は輝く光、輝く光は罪を暴く純白、純白は浄化の証、証は行動の結果、結果は未来、未来は時間、時間は一律、一律は全て、全てを創るのは過去、過去は原因、原因是一つ、一つは罪、罪は人、人は罰を恐れ、恐れるは罪悪、罪悪とは己の中に、己の中に忌み嫌うべきものがあるならば、熾天の翼により己の罪を暴き内から弾け飛ぶべし」

生徒たちは一斉に提唱し始めた、時間が経つにつれて彼らの額から青白い球体がモヤモヤと出始めた。

「それでは『輪眼く・・・・つてもう居ないし・・・・。まあ幻想殺し君、あとは頼んだよ。』

そう言うとスタイルは上条を押しのけていちもくさんに逃げ去った。右手の力があれば何でも無効化出来るとふんだからである。つまり上条があればほぼ鬼に金棒と言つてもいいからである。しかしそれはうまくいかなかつた。
なぜなら上条も一緒に着いてきていたからである。

「おい逃げるな!! その右手の力はドラゴンブレスも防いだじゃないか!!
君がいてこそ意味があるんだぞ!!

なのに背中を見せるなんてどうかしてるぞ……」

「人を盾にしておいてよく言ひぜ……あんなもん右手だけで対処出来るかつてんだ……」

「しかしレプリカとはいって、グレゴリオの聖歌隊を作り出すとはね「なんだよそのグレゴリオのなんとかってのは……？」

「本来は3333人の修道士を聖堂に配して、その祈りを集める大魔術だ」

「へつ、そんなもんまともにやつて勝てる訳ねーだろ……！
ていうかイタチさんはどこ行つたんだよ……？
スサノオとかアマテラスがあれば何とかなるだろーに……！」

「そんなこと聞かれても困るね、僕が逃げたときにはとっくに居なかつたよ」

「なんだよそれ……！」

「でもまあそろ悲観することもないさ、グレゴリオの聖歌隊は大勢の人間を同時に操らなければならぬ。
そのシンクロの鍵となつているものを破壊すれば……」

2人は逃げ続けていたがとうとう挟み撃ちになつてしまつた。

「……一つだけ秘策があると言えばあるんだけど……」

「あらんだつたら早く使えよ……」

「そうかい、なら遠慮なく使わせてもらひます」

そう言つとスタイルは上条の肩を掴んだ。

「おい、切り札つてまさか・・・」

「その通り、君なのさ」

彼は上条を階段から突き落とした。

美濃守の三行崩さなし 三日作の平左衛門の三行表

「それじゃあ、後は任せたよ」

そう言うとスタイルは去つていった。

「何が任せただよ！－あ－もう不幸だああああ－－－－－－！」

一方上条達と別れたイタチは姫神が監禁されている場所を目指して行動していた。

「・・・」
「もか」

しかし行く手には洗脳された生徒達が待ち構えていた。

「火遁・鳳仙火爪紅」

印を高速で結び、術を発動される前に炎を帯びた手裏剣で全員に攻撃をした。

手裏剣は的確に急所をつき、生徒達は倒れた。

「」のままではきりがないな。

仕方ない、あれでも使うか・・・」

イタチは懐から札のような物を取り出し、チャクラを流し込んだ。すると武装した覆面軍団が出現した。

そして多数の覆面軍団は彼らに突っ込んでいった。

「ペインのよこした四象偶忍、本当に役に立つな
とりあえず後はこいつらに任せるとするか」

偶忍達が闘っている間にイタチはこの場を去った。

しかしどこへ行つても洗脳された生徒であふれかえつていた。
イタチは無視しようとしたが中々出来ないでいた。

ため息をした彼は刀を取り出し、片つ端から彼らの首を切り落としてつた。

数分後周りには首なしの斬殺死体が大量に転がつっていたり、大量の血が流れていった。

死体の生臭い臭い、イタチの立つている空間はまさに地獄絵図と化していた。

そこへスタイルがやつてきた。

「ちよ、そんな殺氣じみた田で見つめるのはよじてくれないかな？」

スタイルは冷たい目で見つめるイタチに少しだけ身体が震えた。
普通じやない殺氣を感じ取つたからだ。

「しかし派手にやつたね・・・

彼らの首や死体が「ロロロ」としてやがる。」

「・・・・・」

「それで、吸血殺しは見つかったのかい？」

「これから向かうところだ」

「そうかい、それじゃさつさと彼女を奪還しないとね。
一応核となるものは破壊しておいたしね。」

それにもあの鍊金術師も歪んだものだ。
血路とは自分で切り開いていくものだろ？・・・

「・・・・」

2人がこの場を去ろうとしたとき、誰かの気配を感じ取った。

「当然。侵入者は3人だったはずだが？」

現然。貴様の使い魔はグレゴリオレレプリカにのまれたか？」

暗闇から現れたのは緑色のオールバックの男だった。

「生憎だけど、あいつはかなりしぶといんでね」

「……誰だあいつは？」

「……」
「こいつこそ、鍊金術師のアウレオルス・イザードさ」

「……こいつがか」

「それで？僕達に何のようだい、鍊金術師」

スタイルとはぐれた上条は青白い球体を消しながらただただ逃げ回っていた。

しかし炎はそれを詰めなしかぬのに彼を取り囲んだ。

「くつ！ 囲まれた。もう・・・ダメなのか・・・」

彼は目をつぶつた、覚悟を決めたように。
しばらく目をつぶつたまま静寂が続いた。
再び目を開くとさっきまでイナゴの大群の様に襲いかかってきた青
白い球体が嘘のように消え去っていた。
ステイルが核を破壊したからだろう。

「球体が・・・た・・・助かつたのか?」

上条はその場に座り込んだ。

やくも恐怖に支配されていたかすぐに安堵に變わったからである。

「全く・・・人をおとりにしやがつて。
後で覚えてやがれ！！」

静寂と化した空間で彼は叫んだ。
拳を強く握り締めながら。

「そこへ、

「あなた。そこで何やつてゐるの?..」

吸血殺し」と姫神がやつてきた。

「お前・・・よかつた。」それでミッシュ・ションクリアだ。
さあさつて帰ろうつぜ。」

「帰る?」

「もうだよ。こんな所に閉じ込められてないでさつと外へ出ようつ
ぜ」

「私目的がある。だからここから出るわけにはいかない。
なぜならここでなくてはいけない。いや鍊金術師がないと出来ない
事があるから。」

「けども、仲間だつたら監禁して立てこもつたりしないだろ普通」

「それはアウレオルスに占拠される前。
私が外に出ないのは必要性を感じないだけ
不用意に外に出るとあれを呼び寄せてしまうから」

「じゃあお前、吸血鬼に見つかりたくないからこんな所に引きこも
つているのか?」

「吸血鬼・・・貴方はどんな生き物か知つてゐる?」

突然質問された上条は何も口に出せなかつた。

自分の知つてることをありのまま伝えようとしたが、雰囲的に絶対そうでないからだ。

ならばどうなのか、彼は答えが見つからなかつた。

「変わらない。私達と同じ
誰かのために笑い。行動できる
そんな人達

けど私の血はそんな人達を甘い臭いで呼び寄せてしまう
そして呼びせた後に殺す。

でも理由はない。理由はないけど殺し尽くしてしまう
ここ学園都市は力を扱う場所だから。これの秘密が分かると思ってた
秘密が分かれれば取り除く方法もあると・・・
だけどそんなものはどこにもなかつた・・・

私は1人とて絶対に殺したくない

誰かを殺すぐらいなら。私自身を殺すと決めたから」

同じく無表情だが姫神からは悲しそうな空気が感じ取れた。
一通り聞いた上条は立ち上がり

「なあ1つだけいいか?
吸血鬼を殺したくないのならなぜファミレスで食いだおれていたんだ?」

「簡単。アウレオルスが吸血鬼を欲しているから
私がここになると吸血鬼を呼べないから」

「ちょっと待て、それじゃあさつき壊したこととは全くの正反対じゃないか」

「アウレオルスは約束した。吸血鬼は絶対殺さないって

アウレオルスは言った。助けたい人がいるつて助けるために吸血鬼の力が必要なんだつてその人を助けるためにこの力を使いたいって

「そんなのダメだ。

もしそいつがお前の言つ通りの人間だとしたら、これ以上間違えさせるわけにはいかない。

これが上達させながら本当に耳に通じる「かなし事」

「必然。私のどこが取り返しのつかないと言つのだ？」

「えっ！？」

いきなり声がしたので振り向いてみたらアウレオルスがこちうに向かつて歩いてきていた。

「あ・・・あいつが・・・」

۱۷۰

「完然。仔細無い、すぐそちらに向かおう」

そう言い終えた瞬間、アウレオルスはいきなり上条の目の前に現れた。

いきなりの出来事に彼は驚きが隠せなかつた。

「……………」

上条は拳を強く握り締め、アウレオルス目掛けて右ストレートを叩き込もうとした。

しかしアウレオルスは全く動じることもなく

「これ以上先貴様はいらっしゃへ来るな」

「なつ……」

もう少しでパンチが届く所だったが、なぜか当たらなかつた。周りを見てみると、やつきまで平面だったはずの床がなぜか急な坂になつていた。

「な・・・なんで」

「撫然。つまらんな少年よ……
碎け散る」

「待つて……」

碎け散れと言おうとした瞬間姫神が両者の間にに入った。

「ば、馬鹿やうひつ……・・・・・」

……吸血殺しは吸血鬼を殺せるほどの力……ならば

しかしアウレオルスはこれを見越していたようであり、

「結局貴様は最後の最後で吸血殺しにすがり、頼り、願つた
どうだね、どこか違つてゐる所があるとでも?」

思っていたことをズケズケと言い当てられた上条はただ舌打ちすることしか出来なかつた。

「そんな事はない。この人は吸血殺しの意味を知らなかつた
ここに来たのは今日知り合つた私を助けるためだけの事
アウレオルス・イザード。あなたの目的は何?
ただの一般人を殺して楽しむことがあなたの望み?
もしそうだというのなら私は降りる
私にも慕う神。自らの命を絶つ選択権はある」

「・・・必然。こんな所で時間をわざ余裕も無し」

「...」

「少年、案ずるな殺しはしない」

そう言つとアウレオルスは口を上に釣り上げながら懷に手をいれた。
そして金属の針のような物で突然首を刺した。

「...」で起きたことは全て忘れろ」

「……」

気がついたらなんの変哲もない公園のベンチに座っていた。
隣にはスタイルが煙草を吸いながらよつかかっていた。

「……」

「君がここと書つ事は日本に違いないだらつ
しかし・・・何か重要なことを忘れているよつた・・・」

「重複なこと・・・そつだ、イタチさんは？」

「ああね『氣づいたときこは彼はもうこなかつたよ』

「そつか・・・でもまだ何か忘れているよつた・・・」

「まだあるのかい？まあどうせ、思い出すほど価値のないものなん
だらうナジや」

「や・・・やうのか・・・な」

そう言いながら上条は自然と右手で頭をかき回^{ハサウ}とした。
右手が頭に触れた瞬間、

全て忘れろ・・・・

この言葉と共に失われた記憶が一気に蘇^{ハサウ}ってきた。
全てを思い出した上条は立ち上^{ハサウ}がつた。

「お前の疑問をさつくつと解消するおまじないをしてやる」

「ん？ 東洋の呪いは神裂の専門なんだ
彼女に聞くよ」

「やつ硬^{ハサウ}い」と言わずに、田をつぶつてみなつて

「・・・・」

スタイルは言われた通り田をつぶつた。

「よくも人様をおどりにしやがったな！――！」

上条は叫びながら渾身の右ストライクでスタイルの頭を殴つた。

「何しやが・・・・」

幻想殺しを宿す右手に殴られたスタイルは忘れていたことを全て思い出した。

「日本では記憶を取り戻すには頭に強い衝撃を『^{ハサウ}えるのかい？』

「まあ、やついう事」

上条は笑いながらスタイルを起こした。

その後2人はすぐに公園を出た。

その途中あるものに気づいた。

それは公園の近くあつた小さな木にくつろいでいたイタチだった。

「遅かつたな」

「こんな非常事態に何やつてんだか君は・・・」

「それは置いといて、何か忘れていることはないのかよ?」

「何の事だ?これからあそこに行くんじゃないのか?」

「その様子だと何も忘れていないみたいだね・・・

黄金鍊成による記憶抹消をどうやって防いだ?」

「防いでなどない・・・

お前達と行動し、やられたのは俺の分身だ

何も知らずに敵とやりあうなどどうかしてるからな」

「・・・分身ね。で何か掴めたのかな?」

「一応はな」

「まあそれは行く途中でゆづくつとじよつか

取り敢えず準備が整つた3人は姫神を奪還すべく再び三沢塾を目指して動き出した。

入口の近くまで着いた一曰ここで足を止めた。
なぜなら入口の前に騎士団が整列していたからだ。

「おい、あいつら入口にいた……」

「13騎士団の生き残りか……少し様子を見るとしよう」

3人は木陰に隠れながら彼らの様子を伺っていた。
しばらくして中心にいた小隊長らしき人物がいきなり剣を抜き出し、
それを上に掲げた。

それにつられて他の騎士達も剣を上に掲げた。
すると剣先が赤色に強く光り出した。

「グレゴリオ・クアイア・・・・、真の聖歌隊か」

「えつ？ちょっと待てよ、グレゴリオの何とかには大勢の人々が必要なんじゃ・・・」

「今頃バチカン大聖堂では3333人の修道士が祈りを捧げている
んだろう」

「ヨハネ黙示録第八章第七節より抜粋、第一の御使、その手に持つ
滅びの管楽器の音をここに再現せよ……！」

辺り一帯にラッパの様な音が響いた。

「あいつら、一体何する気なんだ！……？」

「爆撃だ」

「何だつて！…あの中には姫神が、無関係の生徒たちがいるんだぞ！…！」

天上から現れた巨大な光の柱は三沢塾のビルに直撃した。そしてそれに続くように容赦なく崩壊が始まつていった。

「まざい！…」のままじや押しつぶされるぞ！…！」

このままでは危険と判断したステイルとイタチはこの場を去つとした。しかし上条はそんな事関係なしに走る。

「おい！…何やつてんだ！…巻き込まれるぞ！…！」

「うるせえ！…だからと黙つてこのまま見捨てられるかよ！…！」呼び止めたが全く聞き耳を持たないようだ。そして粉塵の中に走つていった。だがやはり迷い込んでしまつた。

「？？？…う、うああああ！…！」

崩壊が始まつてゐるビルから落下した巨大で複数の瓦礫は、それを待つていましたかのようだ。

一斉に彼目掛けて降つてきた。

「火遁・豪龍火の術」

僅か数メートルちょっとと言つ所で、龍の頭の形をした巨大な火球が瓦礫をのみ込んだ。

その衝撃で瓦礫を一気に吹き飛ばした。

僅かのスキにイタチは上条を抱えてその場を脱出した。

「・・・全く世話の焼ける奴だ・・・」

無表情とは言え、少し呆れていたようだつた。

上条は犬のように唸りながら下を見下ろしていた。

そして離れたところにいたスタイルの所に降り立つた。

「全く・・・君は一体なにをやってんだか。

崩壊途中のビルに突つ込むなんてどうかして」

突如異変が起きた。

崩壊が続いていたビルが止まつたのだ。

3人は辺りの時間が止まつたのかと錯覚を起こした。

しかし止まつたのはビルの崩壊のみ、そしてテープの巻き戻しのようビルが復元されていった。

しばらくして崩壊が始まつていた三沢塾は何事もなかつたかのようにそこに建つっていた。

「これが・・・」

スタイル口から煙草が落ちた。

「アウレオルスの・・・黄金鍊成の力・・・」

第九の巻 錬金術師アウレオルス・イザード（後書き）

次がV.S.アウレ何ですが・・・どう闘わせるかについてが全くおも
いつかない・・・
奪還屋やD.B.だったらいくらでも思いつくんだけどなあ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7665w/>

とある幻想殺しと万華鏡写輪眼

2011年11月17日21時38分発行